

ユニテ

2012. 5

39

ロマン・ロラン伝

ベルナール・デュシャトレ

村上光彦訳

1866 - 1944

みすず書房

一般財団法人 ロマン・ロラン研究所

目次

フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で	小森謙一郎	1
『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念 『ジャン・クリストフ』を読み返して	村上光彦	36
追悼 小尾俊人 ロマン・ロランとみずす書房と小尾俊人さん	守田省吾	45
小尾さんへのオマージュ	宮本エイ子	56
『最後の扉の敷居で』から	村上光彦	59

ユニテ・フォーラム

私のロマン・ロラン		長谷川 和宏	68
-----------	-------	--------	----

魂の遍歴―今の私		安 木 由美子	70
----------	-------	---------	----

「ローザ・ルクセンブルクの手紙」とロラン		松 田 有美子	73
----------------------	-------	---------	----

―みすず書房守田さんのお話に関連して、感じたこと―

ロマン・ロラン研究所便り

『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会			77
--------------------	-------	--	----

一般財団法人へ移行			80
-----------	-------	--	----

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書			82
---------------------	-------	--	----

ロマン・ロラン研究所の活動			83
---------------	-------	--	----

二〇一一年度 賛助会員、寄付者名簿			90
-------------------	-------	--	----

『ユニテ』編集を終えて		野 村 庄 吾	91
-------------	-------	---------	----

フロイトとロラン

——災厄の後に、幻想の前で

小 森 謙 一 郎

二人の交流は二つの世界大戦のあいだに始まり、そして終わる。十数年のあいだで会ったのは一度だけ、やりとりは手紙や著書の交換を含めて三〇に満たない。にもかかわらず、そこにはたえず相手の思考を刺激し、みずからの頭脳を触発する何かがあった。事実すでに円熟期を迎えていた彼らの対話は、洗練された知識の交換のみならず、熟慮された確信の応酬でもある。話題は宗教を軸に組織されるだろうが、「神なきユダヤ人」と「教会なきキリスト教徒」の双方にとって、事柄はさほど単純ではない。ここでは戦間期を見据えたそうした両者の交流について、全体の輪郭を時代背景とともに跡づけながら、彼らが互いに提起した議論の現実とその可能性を検討していく。今日の私たちが直面している災厄と幻想は、まさに彼らが当時直面していたそれに震源をもつのだとすれば、二人の対話から学ぶべきことも少なくないだろう。これまで知られることのなかったそれぞれの新たな形象が、まだ訳出されたことのない手紙や日記から導き出されるのだとしたら、未来もまたそこには限りはない（こうした理由から訳出は長くなっても省略せずにおく）。既存の肖像を刷新することは、彼らにとってむしろ身を捧げるべき仕事だったのである。^①

一 プロローグ

多くの出会いがそうであるように、精神分析の父と自主亡命状態にあったノーベル賞作家の交流もまた、共通の知人を介して開始される。一九三三年二月九日、フロイトは精神分析をフランスに導入した初期の人々のひとり、エドゥアール・モノ・ヘルツェンに手紙を送っている。それは先方からの便りに対する礼状であり、数行ながら話題は現代におけるシンパシーの欠如に向けられている。現代社会は人間を臆病にさせ、相互の不信感を掻き立てる。だからこそ、かえって共感というものが貴重になっているというのであるが、今日の情報化社会にはますますあてはまるであろうこの観察のあと、ごく短いその手紙は末尾において、ロランに対する自分の敬意をその知人であるあなたから伝えてほしいと述べている。そして約二週間後、送り主はみずからの言葉を伝え聞いた作家から、はじめての手紙を受け取ることになる。両者の知人は共通の知人としての役割を果たしたのであり、かくして前者は現代社会についての見解が後者によって「大いなるメランコリー」と解釈されたことを知るだろう。のみならず、そこには『フロイトの生涯』の著者アーネスト・ジョーンズをして「非常に注目すべき⁽²⁾」と言わしめたひとつの述懐がなされていた。作家は精神分析をかなり早くから知っていたのである。

ヴィルヌーヴ（ヴォー州）ヴィラ・オルガ

一九三三年二月二日、木曜日

親愛なるフロイト様

エドゥアール・モノ・ヘルツェンよりあなたのお手紙のことを聴き、いたく感動致しました。

僭越ながら、この機会に言わせて頂きますと、フランスでは今たしかにあなたのお名前は広く知られておりますが、私は最初にあなたのお名前を知り、最初にあなたのご労作を拝読したフランス人のひとりです。およそ二〇年前、チュールリッヒの書店で、私はあなたの本を何冊か（とくに『夢解釈』）を見出し、潜在意識に関するあなたの見解に魅惑され

ました。それは私の直観のいくつかに通じるものだったのです。あなたは精神の新大陸に関するクリストファー・コロンブスでありました。このコロンブスが別なるアメリカに到着したのと同様に、芸術や思考についての水先案内人はひとりならずそこにすでに接岸していたものの、それは風まかせの偶然でありました。しかしあなたは新大陸を踏査し、すべての探索者たちに道を開いた最初の人物だったのです。医学だけがこの道を利用したわけではなく、心理学もまたそのあらゆる形式において利用しました。そして今日、文学においてはひとりならずの人間が、あなたが征服した領野を利用しています。もっとも、彼らはそのことに言及せず、またあまりよく知ってはおりません。

私はしばしばあなたについて友人のシュテファン・ツヴァイクと話をしましたが、彼はあなたに情のこもった敬愛の念を抱いています。

あなたのお手紙は、現代における不幸な出来事について、大いなるメランコリーを述べられています。あなたのように戦争に敗れた国にいるというのは悲しいことでありましょうが、私のように勝利した国にしながら自分をそこに結びつけられないというのは——信じて頂きたいのですが！——それほど悲しくないわけではありません。というのも、苦しませる側よりも苦しむ側につくことを、私はつねに好んできたからです。何ということでしょう、時代は（そして人々の精神錯乱は）すべてを均等にしてしまうようです！ あらゆる勝利は勝者を荒廃させ、不幸の歯車は決して回ることをやめません。しかしながら、西ヨーロッパの政治的荒廃が確実なものにみえようと、私は絶望しているわけではありません。人類は頑健です。そしてこうした動乱から、私は精神が新たに生まれ出ていくことを確信しています。たしかに、そうした新生は高くつくでしょう。とはいえご存知のように、自然は出し惜しみするわけではありませんし、哀れみがないわけでもありません。

親愛なるフロイト様、謹んで尊敬と感嘆の念を捧げます。

第一次世界大戦とこれに続くヴェルサイユ体制は、「西ヨーロッパの政治的荒廃」をもたらした。あるいはむしろ、作家はそれ以前から「荒廃」を予期していた。おそらく彼の目には、それがすでに「確実なものに」みえていた。だからといって、彼はそのときも「絶望しているわけでは」なかったし、むしろ「精神が新たに生まれ出ていくであろうことを確信」していた。というより、こうした観点から『ジャン・クリストフ』（一九〇四—二年）を読み直してみれば、彼自身がその「精神」をあらかじめ生み出し、来たるべき「荒廃」に備えていたとさえ言えるかもしれない。そうした読解についてここでは措くとしても、この長編小説の作者が「現代における不幸な出来事」のなかでも最悪の事態に反対し、「勝利した国」から事前に退去していたことは——さらにいえばその後獲得したノーベル賞にまつわる賞金すべてを「不幸の歯車」をとめるために寄付したこともまた——、彼の作品と手紙と行動のすべてを一貫させる事実である。手紙の発信地として記された「ヴィルヌーヴ」は、名称としてたしかにフランス語に属するものの、その名をもって呼ばれる都市自体はしかしスイスに属する。まるで自分の小説の主人公をまねるかのよう、「苦しませる側よりも苦しむ側につく」べく母国を離れたロランは、「新たな都市」から「新生」について語りかけていたわけである。

そして語りかけられた「精神の新大陸に関するクリストファー・コロンブス」の方は、もちろんそのことを知っていた。彼は「戦争に敗れた国にいる」。オーストリアのウィーンでこそ、精神分析の父は生涯のほとんどを過ごしたのであった。もっとも、やがてみるように彼は不本意ながらこの地に骨を埋めることはできないのであるが、それまでの経緯は二人のやりとりを形成する縦糸のうちに含まれる。フロイトは知人を通じて間接的に敬意を伝えた作家に対し、自分の出自をまったく隠さなかった。『夢解釈』（二八九九年）をもって無意識という「新大陸」の存在を知らしめ、精神分析という「道を開いた」彼もまた、みずからを取り巻く歴史的コンテクストから免れることはできず、これとつねに格闘せざるをえなかった。約十日後にそうした「労作」の著者から返事を受け取った反戦作家の日記に

は、次のような記述が読まれる。

フロイト博士からの手紙（三月四日、ウィーン）

大きな苦み。彼は自分を「幻想の破壊者」と呼んでいる。「私は人生の大部分を私自身と人類がもつ幻想を破壊するのに費やしてきました……」。彼にはユダヤ人という感情が重くのしかかっていると言えるだろう、つまり中世には追放され屈従させられ、そして今日あらためてオーストリアでは戦争に、ドイツでは災厄にまみれた平和（la paix désastreuse）に、それぞれ責任ありとされている人種の感情である。彼は人類の未来について非常に悲観的だ。彼は『集団心理学と自我分析』という小著を送ってくれると言っている^④。

とはいえ、「苦み」だけをクローズアップすべきではないだろう。ここで描写されている手紙には、たしかに「甘み」も含まれていた。ウィーンから届いた返事は事実、十歳年下の作家と挨拶を交わすことができた喜びを伝えることからはじまっている（フロイトは自分がユダヤ人であると同時に「十歳年長」であることも隠さなかった）。彼らの世代にとって、ロランの名は「すべての美しき幻想のうちで最も高貴なもの」、すなわち「全人類に愛を払める」という幻想に結びついている。そして精神分析の父はなるほど幻想を破壊することに自分の生を費やしてきたもの——しかしそのようにしてこそ「精神の新大陸」が開拓されたのである以上、誰もその「破壊」をただネガティヴに捉えることはできないだろう——、他方でも、そうした幻想がなんらかの形で実現されるのではないとしたら、私たちの前にはいかなる未来もないだろうとも述べているのである^⑤。

「非常に悲観的」な文面のうちにみられるポジティヴなこの主張は、度重なる留保のためにわかりにくくなっているにせよ、日記の書き手がそれを読みとれなかったはずがない。もっとも、この意味では「甘み」を素直に味わうことができなかった

たからこそ、彼にはかえって「苦み」が強く感じられたのかもしれない。いずれにせよ、「送ってくれると言っている」近著が本当に届いたのを受け、自主亡命状態にあった作家は一九一九年の戯曲『リリユリ』を返す。『ロラン伝』の著者ベルナル・デュシャトレは、これを「人々がとらわれるがままになっているすべての偶像、あらゆる幻想を破壊する」作品と評しているが、⁽⁶⁾ここでその「破壊」を担当する主人公「世界の女神」リリユリに割り当てられた役割は、まさに「幻想」にほかならない。つまり「幻想を破壊する」のに「幻想」をもってするのがロランの方法なのであり、カウンター・フィクションの典型がここにはある。さらに作家は扉に献辞をつけ、「幻想の破壊者へ／フロイト博士／心からの共感と尊敬の念をたたえて」と書いている。⁽⁷⁾彼はおそらく「甘み」をも味わた上で、含まれていた「苦み」を打ち消すべく、献本に対する応答をしているのである。そして次週に届いた礼状から、彼は自分のメッセージがたしかに届いたことを理解する。

ウィーン九区、ベルクガッセ一九番

一九三三年三月一二日

拝啓

貴著を頂きまして、心からのお礼を申し上げます。破壊にもとづくその美しさを、私は久しい以前からもちろん存じておりました。あなたの献辞の洗練されたイロニーは、まさに正當なものと感じます。あなたへの手紙にこの愚かな文句を書き留めたとき、私は『リリユリ』のことを忘れ果てておりました——そしてこれは明らかにすべきではないことです。

すべての国境と橋梁を超えて、あなたの手を握りたく思います。

フロイト⁽⁸⁾

そういうわけで、ファースト・コンタクトは上出来だった。彼らは手紙と著書を送り合い、互いの考えを交換した。時代はヴェルサイユ体制という「災厄にまみれた平和」のうちにあり、二人もまたそのなかで生きていた。そして両者の対話はやがて「幻想」をめぐる争論の様相を呈することになるであろうが、その論点がこれら初期のやりとりのうちにすでに見出されるのは興味深い。もっとも、議論が白熱するのはまだ先のことであり、私たちはまず別の知人の仲介を見なければならぬ。人間と人間が本当に語り合うためには、おそらく少なくとも一度は相手の顔を見ている必要があるのだ。

二 出会

とはいえ、モノ・ヘルツェンに次ぐその知人の仲介もまた、すでに予告されている。ロランが最初の手紙のなかで「友人」と呼んでいたシュテファン・ツヴァイクは、オーストリア出身のユダヤ人作家であり、フロイトとも交流があった（そのことを書き手が知らなかったはずがない）。そして翌一九二四年五月、リヒャルト・シュトラウスの生誕六〇年祭に出席するためウィーンを訪れていた反戦作家は、やはり平和主義的な考えをもっていた同業者を通じて、精神分析の父と面会を果たすことになる。昨年連絡をとりあった作家が音楽の都にきていることを新聞で知っていた分析医は、今度は先方が共通の知人を頼って面会の意思を告げてきたことを嬉しく思い、翌日でも翌々日も家に来てほしいと伝える。実際には三日後、それが最初で最後になるとはもちろん知らず、二人は喜々として出会うだろう。訪問者はそのときの様子を詳しく日記に残している。

〔五月〕 一日、水曜日……

フロイト博士訪問、ベルクガッセ——彼の住まいは、小さな庭に面したほの暗い何室かに分かれている。部屋はすべて、小さな神々や呪物や護符、フェティッシュ人類の性的で宗教的な夢想が投影された幻覚的な品々で満ちている。フロ

イトは痩身で、容貌は少し猿のようだった。瘡に蝕まれた下顎は、ある器具に取り替えられていたが、これはほとんど目立たなかった（フロイトは私と話すために逆光の席についていた）。六ヶ月前に自分は終わったと言いながらも、彼には元気があり、特筆すべき活力があった。「私の時代は過ぎ去りました」——彼は六八歳だ。その学識と高名にもかかわらず、彼は大学教授ではなく、一日六時間もの分析をなお行わなければならない。この点について、彼は嘆いてはいなかった。むしろ非常によいことだと思っていた。

彼の最も若い娘「アンナ」が入ってきた。彼にとって、彼女は秘書であり、英語の協力者であった。彼女は精神分析教育の先生だ。知性的な美しい眼をしていて、額や頬のラインがとても魅力的だった。顔の下方、口元はふっくらとしていた。こうしたタイプのユダヤ人は、私のあらゆる経験にもかかわらず、たえず打ち勝ち難い魅力を及ぼし、感官と精神に磁気のような電流を走らせた。

隣の部屋でフロイトは、何百人もの相手から告白を聞いたわけだが、その多くは事実にもとづいている——（そしてフロイトが言うには、ほとんどの場合、彼らは自分たちが告白をしていることを知らずにいた）——彼は当代で最も法外な、そして最も精確な、人的資料を手に入れている。彼が耳にしたものすべてについて、ひとつの細部も失われはしなかった。彼はすべてを保持していた。彼の記憶は何も漏らすことがなかった。——私をフロイトの家に連れてきてくれたのはツヴァイクであり、彼はずっと以前からフロイトと知り合いで、その仕事を賞讃していたのだが、文学的な好奇心からうずうずしていた。彼はフロイトによって収集された告白が公に打ち明けられるのを見たくてたまらなかったのだ。しかしフロイトは告白の聴き手としての自分の役割をまじめに受け止めていた。彼は秘密を守るだろう。彼は笑いながらツヴァイクに関して言った、「この小説家め！」と。

彼の娘「アンナ」もまた告白を聴いていたが、しかしそれは女性からだけだった。

私たちは今日みられる暴力について語った。そしてまた解き放たれた本能の誠実さについて、フロイトとロシアの小

説家たちによって引き裂かれた道徳上の嘘について語った。一九世紀は平和な時代であるが、しかし（私はこの点を強調したのだが）怖れと嘘にまみれた時代でもあり、カーテンの後ろを見ようとはしなかった。会話はフローベールとその癲癇に及んだ。フロイトは癲癇のことを疑った。彼が主張するところでは、自身でその症例を研究したドストエフスキーがかかっていたのは、いずれにせよまったく癲癇ではなく、ヒステリーだとのことだった（それはまったく逆のことだ）。彼の診断にしたがえば、癲癇だと言われてきた歴史上のあらゆる人物たち、すなわちカエサル、アレクサンドロス大王、ナポレオンについても同様だった。彼によると、癲癇は精神の創造的発達に対応してはいない。脳性の癲癇の例として唯一確実なのはヘルムホルツの例であり、彼は水頭症にかかっている知覚発達が遅れていたとのことである。癲癇のものとされてきた心的属性、とりわけドストエフスキーにおけるように自分の危機について語ることで快感を得るといった特徴は、本当の癲癇に属するものではないということだった。

フロイトがツヴァイクに語ったところでは（彼はフランス語を解し話すこともできたのだが、ほとんどつねにドイツ語で話した）、『アンネットとシルヴィ』は彼が読んだ小説のなかで最も美しい小説だということだった（これは私にとって独特な学問的価値をもつ証言だ）。別れる際、フロイトは私に『精神分析入門講義』を手渡し、また『ガンジー』を送ってくれるよう頼んだ。

フロイトとの会話——彼は私にたずねた。「バーゼルに長く住まっていたのですか？……違う？……そんなはずがない！……だって『ジャン・クリストフ』に描かれているのは」まさにバーゼルですよ！……どのようにしてあの街をお知りになったのですか？……」

フロイトは自分の孤独について語った。彼は私が二〇年前に彼（の著書）を読んだことを知って、心動かされた。当時、彼はまったく反響がないと思っていた。フランスからは賛同を示すような言葉をほとんどひとつも受け取らなかった。ドイツでは敵意をもって扱われた。アメリカでは有名である、がしかし「彼らはまったく何も理解していない」⁹。

この日記についてはとくに註釈せずにおこう。その内容は私たちが知るべきことをみずから説明している。ただひとつ付け加えるべきことがあるとすれば、それはフロイトに頼まれた本をロランは後日たしかに送っているということである。この点を踏まえて、翌月に受け手から出された手紙を読むならば、二人の関係がたしかに深まったことがわかるだろう。友愛はしかし時に論争の機縁ともなることを、彼らは各々すでに何度となく経験していたとはいえ、自分たちにもそうした展開が用意されているとはまだ知る由もなかった。

ウィーン九区、ベルクガッセ一九番

一九二四年六月一日

拝啓！

『マハトマ・ガンジー』はまもなく始まる今夏の休暇のお供となるでしょう。

仕事部屋にひとりでいるとき、ここで私と娘とにあなたから頂戴した時間のことをしばしば考えます、そしてこちらへ引き寄せた赤い椅子にあなたの姿を想像します。

調子は思わしくなく、喜んで人生とお別れしたいところですが、清算の時を待たねばなりません。

あなたとあなたの作品に、心からの祝福を！

敬具

フロイト^⑩

三 誕生日

ところで、フロイトは最初の手紙で自分が相手よりも「十歳年長」であることを告げていた。そしてロランは自分の日記に出会った相手が「六八歳だ」と記していた。実際、前者は一八五六年に、後者は一八六六年に、それぞれ生

を享けている。ということは、出会いの二年後に彼らはそれぞれ七〇歳と六〇歳という節目の誕生日を迎えることになるのだが、そのときになってみると果たして年長者はこの事実を忘れていなかった。一九二六年一月二九日の日付をもったウィーンからの手紙は、作家の誕生日を祝いつつ、面談の思い出を語っている。曰く、それまではあなたを「人間愛の使徒」として尊敬してきた、しかし実際に会ってみると、あなたが強さとエネルギーを高く評価し、またあなた自身のうちに大きな意思力があるのを知って驚かされた、と。⁽¹⁾

そして祝いの手紙は「これからの十年」の多幸を祈りつつ終わっているのであるが、送り主は十年後により込み入った書簡を送るべく運命づけられているということに気づいていない。受け手の方もまた、彼らを待ち受ける未来が翌年には動き出す気配など少しも感じず、同年の相手の誕生日に祝い状を返す。やはり二年前の思い出に浸りつつ、作家はしかしここではじめて先方のことを「友」と呼ぶ。

ヴィルヌーヴ（ヴォー州）ヴィラ・オルガ

一九二六年五月六日

親愛なる友

ご生誕日を祝福する人々に心から加わります。さらに長い間、あなたの精神の光が生の夜を貫かんことを！
そしてあなたには、お体の平安とお考えの喜びを！

敬意ある思い出のこと、お嬢様によりしくお伝え下さい、そして謹んで敬服の念を捧げます。

ロマン・ロラン⁽¹²⁾

これに対しフロイトの方も、作家を「友」と呼びながら、丁重な礼状を書いている。こうして彼らは互いを友として認めたのであり、文通はこのあと紆余曲折を経てちょうど十年続くだろう。もっとも、分析医の手紙は自分自身に

ついてあいかわらず「非常に悲観的」な見解を述べながら、「幻想の破壊者」たる由縁をあらためて説明している。彼はただ科学者として探求し、一片の真理を発見しようと努めてきたにすぎない。自分の仕事はある人々には喜びを与えたかもしれないが、同時に多くの人々に苦痛を与えた。いずれにせよ、あなたのように多くの人間から愛されるには程遠く、自分のような人間が愛されることをあてにするわけにはいかない、と。しかしそういつつも、だからこそ彼はロランの言葉を嬉しく感じているのであり、実際のところ札状は作家に対する感謝の念に充ちている。そこにはやがて激しく交わされる争論の火種はまだみられない。⁽¹³⁾

ともあれ、これら一連のプライヴェートなやりとりは、その内実にしたがって、彼ら二人のあいだにのみとまっていることはできなかった。翌年に出版される科学者の新著はまさに、「ある幻想」を標的にしていたからである。

四 『ある幻想の未来』

精神分析の父と自主亡命状態にあったノーベル賞作家の交流は、こうして新たな段階に移行する。一九二七年に刊行された前者の著作が語る「幻想」とは、主として宗教であり、とりわけキリスト教であった。フロイトに言わせれば、宗教的教義は幻想にすぎない。それは非科学的で非合理的なものでしかなく、したがって「破壊」されるべきではあっても、擁護されるべきでは決していない。実際、ここでの彼の振る舞いは、まさに「破壊者」である。というのも、ロランの文通相手は、精神分析の第一人者として、宗教的教義が成り立っている心理的根拠を科学的に解明しようとしているからであり、そうした理性的な説明をもって信仰なるものを無効にしようとしているからである。彼は言う、宗教は一種の神経症である、と。そのルーツは幼児期にある。寄る辺ない幼児は自分を守ってくれる保護者を必要とする。ここで保護者の役割を果たすのは力強い父であり、成人してからのち自分の無力さを悟った人間は、かつて寄る辺なさを解消してくれた形象をいつしか追い求めるようになる。父なる神という観念は、こうして受け入れ

られ定着してきたのであって、これはいわば集団的な神経症にほかならない。とはいえ、だからこそ宗教という現象は分析可能で治療可能なものであり、かくして精神の病の専門家が扱いうる対象となる。そして彼の仕事が成功すれば、究極的にはキリスト教的ヨーロッパそのものが変革されることになるだろう。レコンキスタが完了した一四九二年以来、新約聖書にもとづく道徳は西欧世界のなかで一定の効果を發揮してきたが、その宗教的教義が昔ほど力をもたなくなった今、旧来の宗教と文化の関係を維持する方がこれを解消するよりも危険なのだ。

こうした主張の行間を読むならば、ひとはフロイトの「ユダヤ人という感情」に気づくだろう。ロランはそれが分析医に「重くのしかかっている」と書いていたが、『ある幻想の未来』にもその片鱗がたしかにみられる。というのも、この著作は「災厄にまみれた平和」のなかで台頭してきたナチズムに一度だけ言及しているからであり、アーリア人のみが文化創造力をもつというその考えをも「幻想」のひとつに数え入れているからである。もっとも、当時の国家社会主義ドイツ労働者党は、合法的な政党として再出発したばかりであり、翌年に初の国政選挙に臨もうとしていたところであった。その結果はさほどかんばしくなく、反ユダヤ主義を公然と標榜する勢力は、数年後に手にするのと同じだけの力をまだもっていなかった。とはいえ、隣国のユダヤ人が気にかけるだけの勢力ではあったのであり、彼が企図したキリスト教的ヨーロッパの解体は、そうしたみずからの危機感をも反映していたのかもしれない。もし信仰心が科学的に解明され、集団的な神経症が治療されるならば、そのときにはいかなる宗教的偏見もなくなるであろう。その暁にはユダヤ人への蔑視もまたなくなるはずであり、『ある幻想の未来』はそこまで見越した上で執筆されているように思われる。

ところで、その著者は一年前に彼を「友」と呼んだ作家に、この本を出版後すみやかに送っている。そして送られた方もまた、すみやかに礼状を返している。ロランがフロイトへ宛てた手紙のなかで唯一日本語訳されているこの礼状は、二人の関係全体にとって、ひとつのターニングポイントとなった。というのも、そこにはただ感謝の気持ちだけでなく、「尊敬する親愛な友」に対する異論が述べられているからである。作家は言う、宗教に関するあなたの分

析は正当です。とはいえ、より重要なものはある宗教感覚、あるいは宗教感情について分析なさることです。それは一切の教義や組織から独立した永遠的な感覚であり、大洋のように知覚しうる限界をもたない感情です。これは洋の東西を問わず、すべての宗教の根源にみられるもので、真の宗教的エネルギーの地下水というべきものです。もっとも、これは生きた魂のうちに認められる単純で直接的な事実であり、生命の自由な噴出にほかなりません。私自身もこのような感覚に親しみを持っており、その限りで私は深く宗教的であると思います。そうした大洋感情はしかし個人的な渴望とは関係がなく、私自身としては永遠の休息にあこがれています。とはいえ、死後の存続ということには、私は何の興味も覚えません……⁽¹⁵⁾。

五 往復書簡

一九二七年一二月五日に書かれたこの手紙について、受け手はしばらく沈黙を守る。しかし約一年半後、夏期休暇で訪れていたドイツ南部バイエルン州のベルヒテスガーデン——その近くにはヒトラーが買ったばかりの山荘があった——から、彼は突如として送り手に返事を出す。それは一九二九年七月一四日のことであり、したがって一四〇周年を迎えた革命記念日のことであった。フロイトは言う、あなたの手紙、とりわけあなたが大洋感情と呼んでいるものは、たえず私を悩ませてきました。次に出すつもり of 著作では、あなたに与えられた刺激から出発して、精神分析の立場から大洋感情について考察しようと思っています。あなたのお名前は出しませんが、それなりの暗示はしています。とはいえ、この段になってみると、あなたの私的なお手紙をこのような形で公にしてしまつてよいのかどうか、疑わしくなってきました。あなたがこうしたことを望まないとしても、それはまったく不思議ではありません。です

ので、もしそのように思われるようでしたら、ぜひお伝え頂き、私の越権を制止願えれば幸いです……⁽¹⁶⁾。
当然ながら、ロランは驚いた。そして同時に嬉しくもあった。彼の方からすれば、自分の個人的な手紙に年長の友

が新著のなかで応答してくれるというのは光栄なことであり、反対する理由はまったくない。とはいえ、一年半前に書いた私信の内容をすみずみまで記憶しているわけもなく、そのことは事前に伝えておく必要があるだろう。そして大洋感情については、この間みずからの研究も深まっており、こちらの方でも新たな著作を準備している以上、そのこともあわせて言っておいた方がよいだろう。そう思った作家はかくして三日後、やはり静養を兼ねて訪れていた中央アルプスの避暑地から次のような返事を書く。

親愛なる偉大な友

一九二七年末に書いた手紙があなたを新たな研究へと促し、ご新著があなたに提起した問いへの答えとなるであらうとのこと、私にとっては大変名誉なことです。それらの問いを公衆の前に差し出す権利を、あなたは完全におもちです。私はあなたに提起した問いに対する責任を回避するつもりはまったくありません。

ただ白状しなければなりません、一年半前のことですので、私は自分の手紙の文面をそれほど正確には覚えておりません。私は当時ヒンドゥー教の精神に関する長大な研究に着手したばかりであったと思いますが、この研究については数ヶ月のうちに『生けるインドにおける神秘と行動』と題して三巻にわけて刊行するつもりです。一九二七年以来、私はあの〈大洋〉感情を大いに深めることができましたし、その数えきれないほどの例を何百という現代のアジア人のうちに見出しました——のみならず、言ってみれば儀式的で何世紀にもわたるその生理学が、ヨガの諸説としてまとめられていることを見出しました……。

研究の最後の方で、何人かのヨーロッパの偉大な神秘主義者たち、とくにアレクサンドリア時代の人々や一四

リギー カルトバート

一九二九年七月一七日

世紀の西洋の人々を比較しつつ読みながら——とはいえ一六世紀および一七世紀におけるフランスの神秘主義に
関するブレモン司祭の重要な著作については語っていませんが——、私は次のことに一度ならず気づき、衝撃を
受けました。すなわち、東洋と西洋とが互いに分けられた二つの世界であるというのはまったく誤りであるとい
うことに——そうではなく両者は同じ思考の流れの両腕であるということに——気づいたのです。そして私は両
者のうちに同じ〈大洋〉の流れを認めたのです……。

私の著作が刊行されましたら、あなたにぜひ献呈できればと思っております（第一巻は来たる十月に、第二巻
と第三巻は一月に刊行される予定です）。

親愛なる偉大な友よ、謹んで敬愛の念を捧げます。

ロマン・ロラン⁽¹⁷⁾

さらに三日後、この手紙に対する返事が送られる。二人を隔てる距離や当時の輸送手段を考えるなら、彼らはこの
間ほとんど即座に互いに反応していたことがわかるだろう。もっとも、迅速さのみならず、誠実さもまた、このとき
の両者の連絡に通底する特徴である。フロイトは私信の内容を公にしても構わないという相手の意向に感謝しつつ、
しかし一年半前に書いた文面を「それほど正確には覚えておりません」という言葉を受け、ロランがみずからこれを
実際に確認することを望んで返事のなかに当の手紙を同封する。とはいえ、分析医は自分の頭を悩ませた文書を保持
することも願っており、それをふたたび送り返してくれるように頼んでもいる。また彼は予告した新著が翌年の二月
や三月より前に刊行されることはおそらくなく、それゆえ相手の三巻本の方が早く出るだろうが、しかし自分の著作
に「大洋感情」の評価を期待しないでほしいと明言している。作家が「神秘と音楽」に開かれているのに対し、その
文通相手はこれらに対して閉じられており、後者が前者と同じ仕方で物を読むとは限らないというわけである。⁽¹⁸⁾

これに応じて、ロランもまた、ふたたび素早く返事する。彼は相手の要望をすべて受け入れ、かつて出した自分の手紙の文面を確認し、これをまた送り返す。しかし「神秘と音楽」という点に関しては、フロイトとは少し違った見方が提示されている。実際のところ、作家は分析医が音楽に疎い事実を知っていたのであるが、にもかかわらず彼はあたかもそのことを知らないかのように振る舞う。それは何らかの取り繕いであるよりも、おそらく思想の反映であるだろう。「調和」こそ、戦争に反対した亡命作家のモチーフではないだろうか。

グランホテル・クアハウス、リギーカルトバート

一九一九年七月二十四日

親愛なる偉大な友

私にお届けになることを望まれていた手紙をお返しします。この手紙は今日の私の感情をなお非常に忠実に表現しており、修正すべきところはまったくありません。

神秘と音楽があなたにとって疎遠であるとは、私にはほとんど考えられません。なぜなら「人間的な何ものもあなたにとって疎遠ではない」からです。私にはむしろ、あなたがその道具を操っておられるところの批判的理性の完全性＝潔白さのために、神秘や音楽を信用していないように思われます。

直観的で批判的な二重の本能に生まれつき関与している私としては、相反する傾向のあいだの軋轢に苦しむことはありませんし、（コルネイユの有名な言葉を臆面もなくパロディーにすれば）見る・信じる・疑う・いうことを同時にうまくやっているのでできます。音楽家はどのように敵対する諸力を調和させるのですし、そこに最高の快楽を覚えさせるのです。

相反するものから最も美しい調和が生まれる

ヘラクレイトスの偉大な言葉を私は自分のものと致しました。

親愛なる偉大な友よ、謹んで敬意を捧げます。

ロマン・ロラン⁽¹⁹⁾

六 『文化の中の居心地悪さ』

しかしながら、フロイトはロランの「敬意」をさほど信じていなかったのかもしれない。彼が予告していた新著は、翌年の二月や三月どころか、当年の十一月に刊行されてしまう。しかも分析医は、作家の許可を得たにもかかわらず、彼の名を伏せたままにし、自分を「友人」と呼ぶ誰かとして紹介している。あたかもみずから向けられた友愛をも幻想として破壊せんとするかのように、「幻想の破壊者」はここで自分の文通相手と距離を保ち、遠回しな言い方で彼に言及しているにすぎない。

もっとも、『文化の中の居心地悪さ』第一版は、大洋感情のようなものがともかく存在することは認めている。自分自身のうちには見出せないにしても、一般的にはたしかにそうした感情はあるようだと言おう。フロイトは言う。そして解釈してみるならば、それは外界との一体感にほかならず、これは幼児がまだ母親の胎内にいるような状態にさかのぼる。つまり自我がみずから外界から区別する以前に抱いていたであろう感覚、自我が自我として認識される以前の原始的な心的感覚、これが分析医によればロランの言う大洋感情の正体なのであり、それは成人の心のうちにもたしかに失われることなく保持されている。

とはいえ、それは宗教の源泉ではない、と「破壊者」は続ける。この点に関して、彼は『ある幻想の未来』におけ

る議論を繰り返すにすぎず、新しいことは何もない。寄る辺なき幼児が父親に抱く憧憬こそが、宗教的観念の起源なのである。もっとも、分析医はこれ以外に思い当たる節はないと言いながら、他方で「その裏にさらに別の何かが横たわっているかもしれない」ことも認めている。彼は「しかしこれはさしあたり霧によって隠されている」と続けて、「別の何か」を明るみに出そうとする身振りはみせず、またどのような「霧」なのか説明もせず、それ以上考察を進めることなく議論を打ち切っている^②。

「友人」はしかもこの新作をその著者から受け取らなかった！　すでにみたやりとりからすれば、これは意外なことであるだろう。二人を引き合わせたツヴァイクが両者の近著を話題にした手紙に対する返事のなかで、ロランは自分がその「友人」にほかならず、フロイトが刊行を待たなかったことを残念がっている^③。それは一九二九年の暮れのことであり、作家の方は文通相手に予告した通り、『生けるインドにおける神秘と行動』の第一巻（『ラーマクリシュナの生涯』を十月に出し、第二巻と第三巻（『ヴィヴェカーナンドの生涯』を翌三〇年一月に出そうとしているところであった。彼は分析医がそれら三巻を読んだ後でなら、みずからの解釈を考え直すべき資料を見出したであろうと思っていた。そして律儀な彼は「親愛なる偉大な友」から問題の本を送られなかったにもかかわらず、自分の著作はまとめて献本したのである。

かくして一九三〇年一月一九日、作家は礼状を受け取ることになる。そこでは『文化の中の居心地悪さ』の刊行が早まったことについての言及はあるものの、その理由はとくに明かされていない。のみならず、著者はみずからを「極端な合理主義者」のうちに数え入れ、精神分析に関するロランの誤解を指摘しながら「あなたの神秘主義」との違いを強調している^④。この意味では、フロイトは文通相手と断交せんとしているかのようにであり、ここで両者の関係に終止符が打たれたとしても、実際それほどおかしくはなかっただろう。礼状は論戦よりも心からの挨拶を送る方がふさわしいという言葉で終えられているが、見解の相違はいまや埋め難く、友愛が持続するのも困難にみえる。

七 海と陸と

しかしながら、約一年後の一九三一年三月一八日、作家のもとには『文化の中の居心地悪さ』の第二版が届けられる。全体の議論に変更はないものの、本文には注が加えられており、「友人」がロランであることが明かされている。さらにその注は『リリュリ』にも触れていて、戯曲の発行年を一九二三年としているように思われるが、これはフロイトが同書を受け取った年にほかならない（すでに述べたように実際の発行年は一九一九年である）。つまり学術上の慣習と客観的な事実という観点からすれば、分析医は年号を誤⁽²³⁾って、記載しているらしいのである。ここでしかし「言い間違い」についての精神分析の基礎的な見解を考慮に入れるなら、おそらくは誤りであるだろうこの記載はむしろ、よき思い出に対する彼自身の愛着を反映していると考えられることもできる。実際、届けられた本の扉には「彼の偉大なる大洋的友へ／陸上の動物より」という献辞が付されていた。⁽²⁴⁾これはすべての事実を端的に要約しており、つまるところ友愛がまだ失われてはいないことを示している。さしもの「幻想の破壊者」も、自分が破壊しそうになったものの貴重さに今更ながら気づいたのかもしれない。

これに対しロランはすぐには返事を出さず、二ヶ月後のフロイトの誕生日を利用して、お祝いとお礼を兼ねた手紙を書く。そこで彼は受け取った献辞と戯れつつ、大洋的／陸上のという対立が自分自身のうちでも成り立つと述べている。作家はその二つの要素を兼ね備えており、自分を実際「古きフランスの中心から出てきた陸上の動物」でもあるのだと言う。いいかえれば、彼はここでもまた「敵対する諸力を調和させる」べく努めており、自分自身のうちで対立を解消することで、分析医が献辞を通じてなお保持していた境界をも無効にしているわけである。彼はさらに大洋感情についてもふたたび説明し、「この感覚ないし直観」はヨーロッパ人にもアジア人にも——まさに洋の東西を問わずに——認められるとあらためて主張する。しかもそれはある一時代に特有のものではなく、むしろ何世紀にも

渡って広くみられるものであり、そうした「ひとを突き動かす不可視の力」をこそ、少なくとも「哲学者や行動家」は考慮に入れるべきなのである（ここであえて精神分析家を名指さないことによって、作家は「精神の新大陸」が「私の直観に通じる」ということに、あらためて相手の注意を促そうとしたのかもしれない）。

親愛なる偉大な友

七五歳のご生誕日のためにここ数日中あなたに寄せられるであろう幾多の祝福のうちに、私の祝福を加えることをお許し下さい！ 心からお祝い申し上げます。ただ真理の探究に対する情熱によってのみ——欲もなく望みもなく怖れもなく——導かれていくあなたの不動なるお仕事が、さらに久しく続けられますように！

ご近著『文化の中の居心地悪さ』に私の名を結びつけて頂いたお礼を申し上げつつ、「欲もなく望みもなく怖れもなく」という言葉によって、私は道徳的な意味であなたを最も近く感じているということをお伝え致します！ 丁寧なご献辞は愛のあるイロニーでもって、「陸上の動物」を「大洋的」友に対立させております。この対立はただ二人の人物のあいだのみならず、同一の人物においても成り立ちます——つまり私のうちにおいても、ということですが。私もまたフランスの田舎から、古きフランスの中心から出てきた陸上の動物なのであり、潮風からは最もよく守られているように思います！ つまり幻想なき眼でみれば私もまたひとりの古きフランス人なのであって、この点に関してそれ以下であるということはなく、幻想なしですますことができます。ご参考までに私のケースを心理学的な好奇心から説明させて頂ければ、私は自分のうちに非常にはっきりと次のものを区別しております。

ヴィルヌーヴ（ヴォー州）ヴィラ・オルガ

一九三一年五月三日

(1) 私が感じてゐるもの

(2) 私が知つてゐるもの

(3) 私が欲してゐるもの

私が感じてゐるものについては、私はこれをあなたにお話ししましたし、『ラ・マクリシュナの生涯』の序文で示しました。それは〈大、洋、的〉なものです。私が知つてゐるのは、モンテニユの「何を私は知つてゐるのか？」「何も知つてはいない」ということです。そして私が欲してゐるもの、それは何もありません。無です……（私のためには何も無い。無ということです）。他の人々のためには、彼らの欲望が成就されますように！ しかし私にとっては、休息——制限のない完全な消滅——以上に望むものなど何もないのです。これまでの人生において、私は十分に苦勞してきました……。しかし付け加えておきましょう、どのようなことであれ、これから起こりうるすべてのことに私は準備ができてゐる、と。「為すべきことを為せ（あるいはより正確には「あるべき自分であれ」）何が起ころうとも」ということが性格のなかに刻み込まれていなかったとしたら、私はフランス人ではないでしょう。

ですから、私の「〈大、洋、的〉な」感覺——あるいは直観——（あるいは何らかの別の名をもつて呼べるかもしれませんが）は、絶對的に無利害的なのです！ 私はこの感覺ないし直観を認めますが、これに固執してゐるわけではありません。それは心理学的なひとつの事実——生に関わるひとつの特徴——なのです。しかし興味深いことに、生に関わるこの特徴は何千ものヨーロッパ的で大陸的な「陸上の動物」の額に実に深く刻印されておられ、彼らはその大部分がアジアについては——さらにはいかなる〈大、洋、的〉についても——何ひとつ知らないのです！ 「〈大、洋、的〉な」私の本が刊行されてからというもの、この特徴はあらゆる方面から（あなたのオーストリアからもまた）私のもとに届いておりますが、それはまるでせき止められていた水が溢れ出すかのようです。私はこ

れに関する一連の手紙をそっくり保持しています。そういうわけで思うに、歴史と行動においては、ひとを突き動かす不可視の力に——爆発して白日のもとにあらわれるのではない限り秘められたままの力に——つねに軸をおく必要があるのです。そうした力はあるひとつの時代に属するものではありません。それは一時代をはるかに超えて存在し、私はヨーロッパとアジアの過去を何世紀も探索しているほどです。哲学者や行動家にとっては、この力を考慮に入れないことは危険であるでしょう。

もっとも、そうした力が存在するということは、いかなる程度においても（私の眼に映るところでは）、それらの真理を含むものではありません。それはただそれらの現実を打ち立てるのです。

親愛なる偉大な友よ、謹んで心から敬愛の念を捧げます。

ロマン・ロラン⁽²⁵⁾

この手紙に対し、フロイトは短いながらも真摯な返事を出している。自分の冗談に、あなたはあなた自身に関する貴重な教示で応答してくれた、と。最近の手術が予告する寿命からして、ふたたび会うことはできないだろうから、この際に告白しておけば、あなたに対するほど「人から人への秘密にみちた引力」を生き生きと感じたことはなかった、と。⁽²⁶⁾

前年までの振る舞いからすれば、ほとんど信じられない告白であり、何の銜いもないこの率直な物言いは、ロランの心を打ったに違いない。分析医があくまで「幻想の破壊者」として振る舞うなら、さらなる反論や異論を提示することもできたであろうが、彼からの返事はしかし「私たちのあらゆる相違点の認識とともに」両者が結ばれていたのかもしれないという憶測でもって閉じられている。そこには残された時間についての予感のほかに「悲観的」な文言はとくになく、あえて「相違点」を際立たせようとする意思もみられない。まさに差異を越えた調和こそ、作家の願っていたことであつた以上、ここでまさにひとつの稀有な友愛があらためて結ばれたと言えるだろう。

にもかかわらず、かくしてようやく通じ合ったかにみえる思いはしかし、突如その調和を失うことになる。一九三三年、ナチス政權が成立するからである。

八 不意打ち

「災厄にまみれた平和」とフロイトにあてたロランの最初の手紙は述べていた。一九二三年のこの手紙から十年後、本当の「災厄」を招来する体制が整うことになるとは、送り手も受け手も当初は予想だにしていなかった。分析医の方は二七年にナチズムについて一度だけ言及し、これを「幻想」と呼んで切り捨てていた。しかしそれはいまや現実になってしまったのであり、実際この間におけるドイツの政治状況は急激な展開をみせた。合法的な政党として再出發したナチ党は、二八年にはじめての国政選挙に臨んだが、一二席を獲得するにとどまった。『ある幻想の未来』から『文化の中の居心地悪さ』第一版までのあいだに、「幻想」はまだ現実にはなっていないかった。とはいえ、それらの著者が後者の版を重ねて文通相手の反戦作家とあらためて友愛を取り結ぶあいだに、代議制議會主義という制度を通じて「幻想」は現実にはじめていたのであり、真の「災厄」への扉が開かれることになったのである。

もっとも、未来はまだ隠されている。三三年、フロイトはロランに『精神分析入門講義』の続編を送っている。すでにみたように、彼らが出会ったとき、前者は後者に第一次世界大戦のさなかウィーン大学で行った講義録を手渡ししていた。今回作家が受け取ったのは、それに新たに追加された講義録であり、まさに両者の文通が続く間にさらに練り上げられた精神分析の考えが示されている。逆にいえば、その練り上げの間に二人の交友関係のすべてが展開されているのであり、たとえ新著のうちに作家の名前が書き込まれていなくとも、著者の脳裏のどこかに文通相手の存在があったとしても不思議ではない。プライヴェートなやりとりが理論の開陳に何の影響も及ぼさないとは言いいきれないだろう。

他方、ロランはこの頃、のんびきならない事態に巻き込まれていた。というより、ある程度まではみずから進んで、その事態のうちに介入していた。『生けるインドにおける神秘と行動』全三巻が出揃った一九三〇年一月頃からすでに、作家はソ連擁護の姿勢を強固にしていた。一九一七年のロシア革命の人道的意義を、彼はほとんど盲目的なまでに信じていた。その態度は『ある幻想の未来』が社会主義に懐疑の目を向けていたのとは対照的であり、文通相手とのやりとりのなかで話題になることはなかったものの、このことは宗教についての見解と同様に二人の思考を分け隔てている。そして三三年三月、ヒトラーが全権を獲得すると、彼は反ファシズム運動の先頭に立つのだが、他方でソ連については引き続き擁護する立場をとった。革命をあまりに理想化しすぎた反戦作家は、スターリンの恐怖政治の深化をみてとることができず、本来ならば反対すべきものを称賛してしまっていた。三五年にはみずからモスクワを訪れ、少なからぬ事実を見たり聞いたりしたにもかかわらず、「人間愛の使徒」は革命がもはや完璧なまでに裏切られていることを見抜けなかったのである。²⁵

こうして二人の交流も自然に途絶えていった。状況が悪化すればするほど、ロランはますます必死になってソ連を擁護した。一方、ナチズムの独裁体制が整備されればされるほど、フロイトはますます「ユダヤ人という感情」を自覚するようになっていった。宗教を幻想とみなす立場を放棄したわけでないにせよ、状況は彼に自分の出自を痛切に感じさせた。そのような環境において、分析医が取り組みはじめたのがモーセについての研究であり、これはやがて生前最後の著作となるだろう。すでに三四年八月には、その草稿序文が執筆されている。そこで掲げられた最終目標は、「今日なおアクチュアルなひとつの問題の解決に寄与すること」であった。ヒトラー政権が成立した翌年、しかも親ナチ勢力によって首相が暗殺された翌月のオーストリアに住むユダヤ人にとって、当の「問題」とは今や公然と掲げられ勢いを増した反ユダヤ主義以外の何ものでもないだろう。²⁶「災厄にまみれた平和」はすでに打ち消され、二人の知識人には思いもよらなかった新たな本当の「災厄」が場をもちはじめていたのである。

九 誕生日、再び

しかしながら、両者の交流は完全に絶たれてしまったわけではない。直面していた状況をそれぞれ打開しようと模索しているなか、ふたたび節目の年がやってくる。十年前、六〇歳と七〇歳の誕生日を互いに祝った彼らは、今度は七〇歳と八〇歳の誕生日を祝い合うことになる。フロイトは還暦を迎えたロランに「これからの十年」の多幸を祈っていたが、その間になされた両者のやりとりは、これまでみてきたごとく量的には決して多くはないものの、質的には実り豊かなものだった。ただ三三年以降の外的な状況が、二人の対話を妨げていた。とはいえ、ますます身動きの取れない立場に陥っていく作家に、旧友たちは繰り返し警戒を促してはいた。七〇歳になる彼のために企画された論集もその一環にあり、精神分析の父もまたこれに協力することになる。かくして「アクロポリスでのある想起障害」と題された公開書簡が、一九三六年一月二九日の日付をもって発表されるのである^⑩。

もっとも、一見したところこの書簡のテーマ自体には、ロランに対する気遣いがあるようにはみえない。「アクロポリスでのある想起障害」とはフロイト自身の経験にほかならず、書簡の内容も彼が一九〇四年にしたギリシア旅行の自己分析で占められている。四八歳だった分析医はたまたまアテネへ行く機会に恵まれ、かの有名な古代の神殿を目にした。そのとき彼は「これらはすべて本当に学校で学んだ通りに存在しているのだろうか」という奇妙な想いとらわれた。これが「ある想起障害」のいわば症状であり、自己分析の結論にしたがえば、その想いは彼自身の父に関連している。商人だった父ヤーコブはギムナジウムを出ておらず、アクロポリスなどにさしたる感慨を覚えるはずもなかった。逆にいえばギリシア旅行そのものが父に対する息子のひそかな優越を示しており、昔から無意識のうち禁じられているこの優越感こそが、息子に奇妙な想いを抱かせた原因だったというのである。

表面的にはフロイトの自己分析でしかないこの書簡はしかし、ロランにどう関係しているのか？ 実はきわめて深く関係しているのであり、それというのも送り手は何の言及もしていないが、奇妙な想いのエピソードは『ある幻想

の未来』のなかで触れられているからである。つまり二人の対話が深まるきっかけとなった著作のなかで触れたエピソードをあらためて自己分析した結果が、まさに公開書簡の内容そのものなのだ。しかも分析医は当のギリシア旅行を十歳年下の弟と一緒にしており、それゆえ作家と同年の道連れがいたことも明言している。いいかえれば、あたかも文通相手とともにすべての経験を分かち合ったかのように、自己分析は進められているのである。

それだけではない。最終的に父に対する息子の禁じられた優越を説くこの書簡の結論は、父への憧憬を宗教の起源に求めるフロイトの見解に呼応している。この意味では「大洋的友」に対してあらためて自説の正当性を主張しているようでもあり、かつての対話を思い起こさせんとしているようでもある。しかしここでは、かつて海と陸との対立を乗り越えた「神秘主義」作家の見解を、「合理主義者」もまたそれなりに尊重しているように思われる。というのも、後者はギリシア旅行そのものが海を渡ってなされたことを忘れていないからである。しかもトリエステからアテネへ向かった航海は、「陸上の動物」にとってはじめての本格的な航海だったのであり、これは当然ながら「想起障害」に先立っているからである。つまり海を渡ってはじめて——はじめて海を渡って——分析医は父に関係する奇妙な想いを抱くことになったのだ。ここでは「大洋感情」についてはとくに何も述べられていないが、そうした順序と経験はロランの見解に反するものではないだろう。いずれにせよ、旧友たちが彼に送っていた警告にあまり耳を傾けようとはしなかった作家にとって、ウィーンからの三年ぶりの音信は心に響いた。

ヴィルヌーヴ（ヴォー州）ヴィラ・オルガ

一九三六年二月八日

親愛なる友

私の誕生日のためにして頂いたことにどれほど感動したか、お伝えしようありません。

シュテファン・ツヴァイクのおかげであなたと個人的に知り合うことができ、十年前のその出会いから私たちの友愛が生まれたということは、私が彼に対して抱いている感謝の気持ちのなかでも小さい部類には入りません。内面の深淵の奥底まで怖れることなく見通すことのできた眼差しを、私はずいぶん前から賞讃しておりますが、そうした眼差しをもつ人間に私がどれほど深い尊敬の念を抱いているか、あなたはご存知です。彼の好意について、私は嬉しく、また誇りに思います。

謹んで心からのご挨拶を捧げます。

ロマン・ロラン⁽³¹⁾

それから三ヶ月後、「親愛なる友」が八〇歳の誕生日を迎えたとき、なおスイスにとどまっていた作家は祝辞を送っている。その手紙は現存しないものの、やはりフロイトの心に触れるものであったらしい。⁽³²⁾ おそらくは娘のアンナがタイプで打ったであろう簡潔なお礼の言葉の下に、分析医は自分の思いを書き記したためている。そしてあいかわらず遠回しではあるものの決して誇張ではないであろうその数行が、両者の直接的なやりとりを締めくくる。精神分析の父はこれを最後にみずから文通相手に「友」と呼びかけることはないだろう。

ウィーン九区、ベルクガッセ一九番

一九三六年五月

八〇歳の誕生日をご祝福頂き、心より感謝申し上げます。

敬具

フロイト

〔以上印刷、以下手書き〕

敬愛する友

あなたがご署名になったお手紙が一体どれほどの幸福を私にもたらしたか、お伝えすることはできません。今の私はかつて——もちろん自己保存のために——自分自身でそうだと信じ込んできたのと同じように、賛辞や非難というものに対して鈍感ではないのです。³³

十 エピローグ

こうして二人の文通は終わりを告げる。

二年後の一九三八年三月一日——この日付はみずからが示す出来事を前未来形で反復している——、すでに現実となっていた「幻想」が、ついにフロイト自身を巻き込む。ナチス・ドイツ軍が国境に出勤、翌日にオーストリアに侵入、翌々日にこの隣国は併合された。ウィーンの自宅兼診療所にもゲシュタポが乗り込んできて、財産を没収していった。娘のアンナを含め、家族もたびたび連行され尋問を受けた。精神分析の父はそれでも長年住み続けた土地から離れることに当初は抵抗していたが、周囲の説得と協力もあり、最終的に三ヶ月後の六月四日、イギリスへと亡命する。若い頃から憧れていたダーウィンを生んだ国の首都で、彼は少なからぬ歓迎を受けた。すでに二年前から「賛辞や非難というものに対して鈍感ではない」八三歳の癌患者にとって、迫害から歓待へと身分を移せたことは僥倖以外の何ものでもなかった。ロンドンにおいてこそ、彼はヒトラー政権成立以後に本格的に着手しはじめたモーセ研究を遺書のごとく出版し、それからほどない三九年九月二三日、その生涯を閉じる。

この間、ロランの方もまた住居を移していた。第一次世界大戦の勃発以来、基本的にスイスで暮らしていた反戦作家は、くしくも「親愛なる友」が亡命したのとほとんど同じ頃、フランスへ戻ることにした。すでに一九三六年一月くらいから、スイス・フランスの価値がフランス・フランに対して上がってきていたし、またフランス語圏スイスに

おいても次第にファッショ的な氣運が高まってきていた。こうした政治的經濟的理由に加えて、ロシア出身の二番目の妻マリ——彼女は夫よりほぼ三〇歳若く、前夫との息子をモスクワに残していた——に對する将来的な氣遣いもあった。みずからの盲目をなかなか認められなかった革命の擁護者は、ようやくスターリンの恐怖政治に気づきはじめていた。彼にとつて、それは大いなる裏切りにほかならなかったが、だからといつてもはやどうすることもできない。そして故郷にほど近いヴェズレーに居を移した翌年、あろうことか独ソ不可侵條約が結ばれる。反全体主義運動の旗手にしてソヴィエトの熱烈な支持者であつた作家にとつて、それは完全なる矛盾を意味した。フロイトの死のちやうど一ヶ月前、「人間愛の使徒」もまたひとつの終焉を悟らざるをえなかつたのである。⁽³⁴⁾

鬼籍に入った文通相手よりも十歳年下の彼にはしかし、まだ余命があつた。その時間の多くを彼はライフワークのベートーヴェン研究に費やす。もつとも、世界の歴史は好転しなかつた。ポーランドに侵攻したドイツに對し、イギリスとフランスは宣戰布告した。戦火は次第に拡大し、第二次世界大戰へと突入していく。ふたたび開始された總力戰に作家の祖国は長く耐えられず、彼がヴェズレーに落ち着いてから二年後の一九四〇年六月、敗北が訪れた。数年前に文通相手のユダヤ人の身に起きたのと同じような事態が、ロランの周囲にも生じることになった。とはいえ、迫害の対象となりえた最初の妻クロティルドとなお一緒にいたなら話は別であつただろうが、彼の身は安全だつた。敵軍を自宅に宿泊させねばならなかつたにせよ、家族がゲシュタポに連行されたり尋問されたりすることはなかつた。

作家は超然として仕事をつづけ、四四年八月にはパリ解放を知ることになる。しかしその間、徐々に体力を奪つていった数々の病魔は、彼が年を越すことをついに許さなかつた。最後に許されたのはクリスマスにベートーヴェンのソナタ作品一一をみずからピアノで弾くことであり、ただ二人の私的な友人だけがその聴衆となつた。⁽³⁵⁾

こうしてみると、戦間期に始点と終点をもつ類稀なる文通は、その後の彼らに何の影響も及ぼさなかつたのであろうか？ フロイトもロランも、三六年五月以降は相手の思考をもはや想起することなく、各自の遺作に没頭していったの

であろうか？ 表面的にはそうみえる。しかし前者が死の直前に公刊しえた『モーセという男と一神教』のなかには、出エジプトを指揮した預言者を彷彿とさせる偉大な男の例として、「ゲーテ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ベートーヴェン」という三人の名があげられている。この一節を目にするとき、私たちは今やこう自問することができるよう、その著者は「音楽」に疎かったのではなかったか、と。そしてさらに踏み込んでこう問いを重ねることもできるだろう、にもかかわらず精神分析の父をして楽聖の名を呼び起こさせる人物がいたとしたら一体それは誰でありえたか、と。このとき私たちは彼が十五年前に一度だけ出会った作家の名をもって答えとすることができるかもしれない。実際のところ、「大洋の友」のほかに果たして誰が、ウィーン古典派三大作家の最後の一人の偉大さを精神分析の父に教えることができたのだろうか。⁽³⁶⁾ いずれにせよ自分の思考とは無縁であった音楽家をあえて呼び出したとき、「極端な合理主義者」の脳裏にかつて論難した「神秘主義者」の思い出がよぎったとしても、そこに偶然的なものは何ひとつない。

他方、後者が前者の遺著を読んでいたかどうかは不明である。両者の直接的な連絡はすでに途絶えており、「親愛なる偉大な友」の計報に接したとき、作家もまたみずからの幻想の喪中にあつた。フロイトの死に対して彼は日記に幾行か記し、葬儀に参加したツヴァイクに哀悼の意を告げた。⁽³⁷⁾ 打ちひしがれた当時の彼にはほかに考えるべきことが山ほどあつた。しかし、やや落ち着いてから本格的に再開されたライフワークを今から読み返してみるならば、ひとは作家によって描き出されたベートーヴェン像が、精神分析の父によって描き出されたモーセ像に似通っていることに気づくかもしれない。のみならず、第九交響曲について考察していくなかで、ロランは楽聖がシラーの『モーセの使命』をも読んでいた事実をつきとめている。⁽³⁸⁾ 分析医のモーセ論はゲーテ以後の諸文献を踏まえているが、祖国に戻った作家が明らかにした事実にはとくに言及していない。この意味では後者の遺作はあたかも年長の友の遺著を踏まえた上で、その言わんとするところを別の仕方で言い直したかのようであり、これをさらに補足し拡張したかのようでもある。『モーセという男と一神教』が抵抗しようとした新たな災厄——やがて殲滅^{ショアー}という名で呼ばれることになる

眞の災厄——に、『ペートーヴェン』もまた別の仕方で抵抗しようとしていたのかもしれない。

精神分析の父が反戦作家に宛てて送った最初の手紙には、ある幻想が何らかの形で実現されるのでなければ未来はないだろうと書かれていた。それはいいかえれば、未来なるものは幻想を前提としており、実現された幻想こそが現実を形成する、ということである。これまでみてきたように、はからずもフロイトはまさにそのことを身をもって経験することになったのであるが、そうした「幻想の破壊者」に対して幻想を破壊するのに幻想をもつてする方法を示したのが罗兰であった。この方法にしたがうなら、実現された幻想を破壊するためには新たな幻想をもつてすべきであろうし、形成された現実を変えるためには前提された幻想を別の幻想に代える必要があるだろう。そして死を目前にした両者がそれぞれモーセとペートーヴェンについて語ったとき、彼らの頭の片隅にあったのはまさにこのことだったのではないか。ナチズムあるいは全体主義という現実に対して二人がなそうとしたのは、その基礎たる幻想を破壊することであり、その破壊は預言者と楽聖の新たな形象を通じて——したがって過去には決して存在しなかったがゆえに——まだ幻想であるところの未知なる形象によって——場をもつのではないか。現在ではなく未来のうちに、「破壊者」たちがもはや現実には存在しないであろう時間のなかで。

おそらくここに、前代未聞の災厄——人道に対する人災——の後に思考すべき何かがあるだろう。現実が存在する他者たちのみならず、これから生まれてくるすべての他者たち、絶対に出会うことのないであろう未来の他者たちに對する責任をも考えなければならぬ今日、私たちは果たしていかなる幻想を提起することができるのか。実現された幻想としての現実——一族のみならず生物全体の殲滅（ショウマツ）をも引き起こしうる法外な力を人類が手にしたという事実——に、私たちはいかなる幻想をもつて抵抗することができるのか。その直接的な答えをフロイトと罗兰の対話から引き出すことはできないにせよ、少なくともそこには鍵となる契機が含まれているように思われる。というのも、彼らの没後もない一九四五年八月六日、法の外の怪物は文字通りはじめて「爆発して白日のもとにあらわれる」の

だから。しかしその存在にも歴史がないわけではない以上、これに対する「ひとを突き動かす不可視の力」が——無意識であれ大洋感情であれ——、来たるべき現在をもちたさなければならぬ。そして今のところ日付はまだ、別なる爆発と別なる出動を予示した三月一日でとまっている。

(武蔵大学准教授・ヨーロッパ思想)

- (1) 本稿は平成三年度武蔵大学総研プロジェクトの研究成果の一部であり、ロマン・ロラン研究所主催の公開講演(二〇一一年一月一九日、京都大学)において行った口頭発表にもとづいている。開催にあたってご尽力頂いた研究所の方々、また発表の際さまざまな問いかけやご意見をお寄せ頂いた方々に、この場を借りて深く感謝申し上げる。なお本稿において引用された外国語文献のうち、日本語訳があるものに関しては参照のうえ該当箇所を示したが、場合によって適宜変更させて頂いた。
- (2) Ernest Jones, *The Life and Work of Sigmund Freud*, vol. 3, London, The Hogarth Press, 1957, p. 102 (竹友安彦・藤井治彦訳、紀伊國屋書店、一九六九年、四四一頁)。
- (3) Henri Vermorel et Madeleine Vermorel, *Sigmund Freud et Romain Rolland : correspondance 1923-1936*, Paris, PUF, 1993, p. 216-217.
- (4) *Ibid.*, p. 222. なおここで「人種 (race)」とロランが書いているのは、フロイト自身がみずからの出自を説明するなかで *Rasse* という語を用いているのを踏まえている。そして分析医はおそらく故意に——イロニーをもって——そうしていると思われる。
- (5) *Ibid.*, p. 219, p. 600 ; Sigmund Freud, *Briefe 1873-1939*, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1980, S. 359-360 (『書簡集』生松敏三訳、『フロイト著作集』第八巻、人文書院、一九七四年、三四九頁)。
- (6) Bernard Duchatelet, *Romain Rolland, tel qu'en lui-même*, Paris, Albin Michel, 2002, p. 212 (『ロマン・ロラン伝——1866-1944』村上光彦訳、みすず書房、二〇一一年、二二六頁)。

- (7) Vermorel, *op. cit.*, p. 225.
- (8) *Ibid.*, p. 226, p. 600.
- (9) *Ibid.*, p. 239-240.
- (10) *Ibid.*, p. 256, p. 601.
- (11) *Ibid.*, p. 263, p. 601; Freud, *Briefe*, a. a. O., S. 379 (三六七頁)。
- (12) Vermorel, *op. cit.*, p. 266.
- (13) *Ibid.*, p. 266, p. 602; Freud, *Briefe*, a. a. O., S. 385 (三七三頁)。
- (14) Sigmund Freud, *Die Zukunft einer Illusion* (1927), *Gesammelte Werke*, Bd. 14, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1968, S. 353 (『ある錯覚の未来』、高田珠樹訳、『フロイト全集』第二〇巻、岩波書店、二〇一一年、三三三頁)。[○] 本稿ではロマンへのやらむらぎを踏まえて Illusion の訳語として「幻想」を保持している。
- (15) Vermorel, *op. cit.*, p. 303-304 (『ちづから見てゐる美しい顔』、宮本正清訳、『ロマン・ララン全集』第三六巻、みすず書房、一九七九年、二五九―二六一頁)。[○]
- (16) *Ibid.*, p. 308, p. 602; Freud, *Briefe*, a. a. O., S. 405-406 (三九二頁)。[○]
- (17) Vermorel, *op. cit.*, p. 309-310.
- (18) *Ibid.*, p. 310-311, p. 603; Freud, *Briefe*, a. a. O., S. 406 (三九二頁)。[○]
- (19) Vermorel, *op. cit.*, p. 312.
- (20) Sigmund Freud, *Das Unbehagen in der Kultur* (1929), in *Gesammelte Werke*, Bd. 14, a. a. O., S. 421-431 (嶺秀樹・高田珠樹訳、『フロイト全集』第二〇巻、前出、六七―七八頁)。[○]
- (21) Vermorel, *op. cit.*, p. 347-348.
- (22) *Ibid.*, p. 313-314, p. 603-604; Freud, *Briefe*, a. a. O., S. 410-411 (三九六―三九七頁)。[○]
- (23) Freud, *Das Unbehagen*, a. a. O., S. 422, Anm. 1 (六九頁、注一)。[○] なお岩波全集版の日本語訳は、『おそらく慣習と事実を踏まえた上』、実際の発行年のみを示している。
- (24) Vermorel, *op. cit.*, p. 328.
- (25) *Ibid.*, p. 348-349.

- (26) *Ibid.*, p. 351, p. 604-605 ; Freud, *Briefe*, a. a. O., S. 424 (四一〇頁)。
- (27) Vermorel, *op. cit.*, p. 365.
- (28) Duchatelet, *op. cit.*, p. 294-322 (三三〇-三三四頁)。
- (29) 以上の点について詳しくは、拙論「フロイトの歴史小説」——『モーセという男と「神教」草稿序文を読む』(『フィクシヨ
ン論への誘い』『近刊』)を参照されたい。
- (30) Sigmund Freud, 'Eine Erinnerungsstörung auf der Akropolis: Brief an Romain Rolland' (1936), in *Gesammelte
Werke*, Bd. 16, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1968 (「ロン・ロン・宛書簡——アトロポリスでのおぼろげな想起障害」
福田覚訳『フロイト全集』第二一巻、岩波書店、二〇一一年)。
- (31) Vermorel, *op. cit.*, p. 420.
- (32) *Ibid.*, p. 412-413.
- (33) *Ibid.*, p. 413, p. 605.
- (34) Duchatelet, *op. cit.*, p. 337-347 (三三〇-三三八頁)。
- (35) *Ibid.*, p. 360-392 (三九七-四三三頁)。
- (36) 以上の仮説とその検証について、詳しくは拙論「留保された未来——フロイトと偉大な男たち」(『思想』第一〇三四号、
二〇一〇年)を参照されたい。
- (37) Vermorel, *op. cit.*, p. 451.
- (38) Romain Rolland, *La Neuvième Symphonie* (1943), in *Beethoven : les grandes époques créatrices*, Paris, A. Michel,
1980, p. 934, note 1 (『第九交響曲』蜷原徳夫・北沢方邦訳『ロマン・ロラン全集』第二五巻、みすず書房、一九八〇年、
六五頁(注一))。

『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念

『ジャン・クリストフ』を読み返して

村上 光彦

デジャトレ氏の『ロマン・ロラン伝』を訳し終えたいま、わたしのなかでいろいろな思いが渦巻いています。

ロランの生涯を辿りおえて、なかでも感銘深く思ったのは、ロランは自分の生き方をいつも反省しながら生涯を送った人だったという印象です。ロランの生き方には浮わついたところがなく、いつもまわりの世界と自分自身とをまじめに見据えていました。とくに驚いたのは、ロランが早くも幼いころから世界のなかでの自分の立場を意識していたことです。

『内面の旅路』第一章「崩落とし」の書き出しを読みかえしましょう。

わたしの幼な心になっさきに課された問い。

——『ぼくはどこから来たのかしら。それに、どこに閉じこめられているのかな……』

これが、生まれてまっさきにロランが抱いた疑問だったのです。生まれ落ちたとたんにごく幼いころから『ぼくは囚人なんだ』と思いつめて、その気持ちが心にとりついて離れなかった、ということです。『内面の旅路』はこう続いています。

フランソワ一世（一四九四～一五四七。ルネサンス期のフランス国王）はわたしの故郷の古い教会サン・マルタン・ド・クラムシーの危っかしぐらつく内陣に入ったとき（伝説の語るところでは）「これは

またみごとな単落としじゃ！」と言ったそうだ。わたしは《単落とし》にいたのだ。

まず視覚的印象をひとつ。——これはわたしの幼いまなざしが捉えた最初の地平だ。かなり広い、舗装した中庭があつて、その中央には庭園があり、中庭は三方から囲まれているが、それぞれを区切るのは、わたしの感じではかなり丈高く見えた家々の三つの壁面だった。第四の面をなすのはわが家の向いに通っている街路と、その通り沿いの家々だが、それらとわが家とは運河によって隔てられていた。以上の全体が形づくる四辺形は水面より高くテラス状に持ち上がつてはいたものの、一階にある自分の部屋に閉じこめられた子どもの目で見ると、それは動物園の一角の、四方を壁で囲まれた奥に掘り込まれた、猛獣を囲い込んでおく壕という感じだった。

幼くしてこの世を牢獄だと感じるとは！ さらに成長して十六歳か十七歳のときにシェークスピアの『ハム

レット』を読みました。少年ロマンはそのおりに、ハムレットの発したこういう台詞に出会いました。

「デンマークは監獄だよ」。

「では、世界も監獄ですね」。

「広大な監獄でね、そのなかには独房、閹牢、天守閣がたくさんある……」

その先で、ハムレットはこうも語っています。

「おお〈神〉よ！ 胡桃の殻のなかに閉じ込めてもらえたらいいのだが、そして限らない空間の王者としてのぼく自身を見つめられるといいのだが……」

これがロランの生涯の物語のすべてだとあります。

胡桃の殻という監獄に閉じ込められながら、無限の空間の王者としての自覚をもっていたとは、凡人の思いつかない夢想です。十七世紀のフランスの思想家パスカルもまた、人間の意識に備わる、宇宙のなかの無限小の存在から無限大の存在にいたる万物を思惟できる能力について語っています。そして『内面の旅路』によると、ロマンという子どももまた、おのれの自我が底なし穴のような深淵から浮かび上がってきたとたんに、その自我が

《池の縁からはみだすほど巨大な睡蓮》のようだと感じたといいます。わたしたちにとっては、自分の意識の目ざめの時期を思い起こそうとする試みそのものが縁遠いようです。

さきほど《ロランは自分の生き方をいつも反省しながら生涯を送った人だった》と申しあげました。きょうここに集まられた方々は、日ごろロマン・ロランという人間とその作品とに関心をもっておられることと存じます。ぜひおねがいしたいのですが、ロマン・ロランにおける意識の表現に親しむ手がかりとして、『ジャン・クリストフ』の最初の部分を読み返していただきたいと思います。

ロラン自身、この大河小説を書きだしたころ、その作品を心のなかで《ベートーヴェン》と呼んでいました。ロランは彼の主人公を、だれよりもまずベートーヴェンを思わせる存在として発想したのです。そのため、ジャン・クリストフの幼年時代には、ベートーヴェンの幼時期から写しとった特徴がいくつも認められます。しかし、ロランは、ほかのさまざまな要素をも、主人公を造型す

るために盛り込んでいます。たとえばモーツァルトの子どものころの挿話とか。しかし、とくに目立つのは、ロランが彼自身の生涯を振り返って汲み上げた思い出の数々を、ジャン・クリストフという架空の存在の人格に貸し与えた痕跡なのです。

『夜明け』の冒頭には「河の轟きが家の裏から立ち昇ってくる」とあります。交響曲の第一主題のように、読者の脳裏にライン河の轟きが響き渡ってきます。ここに、この大河小説のすべてが凝縮されています。

そして第二の段落に「新生児は揺りかごのなかで身動きしている」とあります。全編の主人公がこうして紹介されるのです。このあとの数行は、からだの動きにつれて意識が目覚めてゆく様子を追っています。読みだしてすぐ、文学作品のなかにそれまでになかった調子が響いてくるような感じがしてきます。

フランス文学はその開花の時代以来、人間への関心を軸として展開してきました。ここでフランス文学史の話を論じだすわけにはいきませんが、とにかく十七世紀にラシーヌやモリエールが数々の傑作を書いた時代から、人

間の性格のさまざまな面につきつぎと照明が投げかけられてきたことを思い出してください。モリエールひとりを取り上げても、人間ざらい、吝嗇、偽善、術学など、十人十色の特徴が観客にまざまざと印象づけられていました。

ところが二十世紀の夜明けに書かれた『ジャン・クリストフ』では、生きている人の意識を解剖台にのせて切り刻んでゆくようではなく、赤ん坊のまだ目覚めていない心が語られてゆくのです。目覚め直前の混沌とした星雲状態のまま、ようやく活動しだしたとおりの語り方です。そのページのなかから、こんどは「聖マルティン教会の鐘が夜のなかで歌った」のです。物語のなかでまたまた音が響きだします。しかし、その音はおそらく乳呑み児の意識のなかへは入っていかなかったでしょう。鐘の音を聞いたのは母親のルイーザです。彼女はそのあとで《大河の轟き》も聞きます。しかし、いまのところ、乳呑み児のなかには大洋のように混沌とした無意識が広がっているばかりです。しかし、読者はやがてこういう記述に出会います。「月々が過ぎてゆく。記憶の島々が

生の大河から浮かびだす」(JC, p. 12)。もっとあとにこうあります。「大河……。鐘……。どんなに遙か以前のことを思いだしても、——時間の遙か彼方を探っても、それが自分の生涯のどの時刻のことでも——この両者の深くまた耳慣れた声がいつも歌っている」(JC, p. 12)。

音の思い出をよみがえらせるのが未来の音楽家であり、またこの作品を書いたのが音楽的な魂であるから、それが特筆すべき記憶として重視されているのにちがひありません。とにかく、幼いジャン・クリストフが夜明け前、なかば眠りのなかに浸ったまま、教会の鐘が静かに問答を交わしているのを聞いていると、その音につれて、いまはもう亡くなった人たちが遠い昔に見た夢とか、彼らのもろもろの欲望や希望や悔いとかまで立ちのぼってくるのでした。幼な子はその人たちのことをまるきり知らなかったのに、それでも自分は彼らのなかにいたのだし、彼らは自分のなかでまた生き直していたのです。自分自身、とうにこの世から去った、その人たちにちがいないのだ、という気持ちさえ湧いてきます。

朝日が部屋に差し込んでくると、この子の見慣れた小

さい世界が照らしだされます。この子は、机や、戸棚や、床に敷き詰められた板石、大時計などに見覚えがあるのを認め、それぞれを名づけにかかります。作者はこう書いています。

この部屋にはなんとたくさんのもがあることか！
彼はそれらをなにもかも知っているわけではない。
彼は毎日、彼のものであるこの宇宙のなかへ探検しにいくと、また出かけてゆく。なにもかも彼のものだ。なにひとつどうでもよいものはなく、なにもかもそれなりの価値がある。人間だろうと蠅だろうと、なにもかもが平等に生きている。――猫も、暖炉に燃える火も、机も、さしこんで来た一筋の日ざしのなかで舞っている埃の粒々も。部屋は一つの国だ。一日は一生だ。こうした空間のなかにいて、どうしたら自分は自分だと認められようか。世界はこうも広いのだ！　こうも広くては迷ってしまう。

部屋というこの広大な空間のなかにいると、自分その

ものが見覚えのない存在になりそうだと、いうのです。目覚めたばかりの意識のなかで、自己認識の努力がもう始まっていたのです。このくだりを読むと、ロランが生きているあいだ、フランスという国のなかで、また世界のなかで、彼自身がそのときそのときにどこにいるのか、どういう地点に来ているのかを見定めようと努めてやまなかったことが思いだされます。《三つ子の魂百まで》と申しますが、ここに描かれているジャン・クリストフという幼児の意識の目覚めは、ロラン自身の幼児体験を写しとったものだと言えそうです。

ジャン・クリストフという幼児の意識生活の叙述は、年月が経つにつれてしだいに精緻さを加えていきます。

ある日、幼児は祖父といっしょに田舎道を散策していたとき、祖父と顔見知りの農夫のガタ馬車にのせてもらいます。そこに描かれている馬の影の物語は、米国の哲学者で心理学者だったウィリアム・ジェームズが言いだした《意識の流れ》に即した叙述の好例と言えましょう。フランス文学史上、《意識の流れ》による叙述を初めて活用した作家としては、『月桂樹は伐られた』（一八八七）

の著者エドゥワール・デュジャルダン（一八六一〜一九四七）がいて、この人にはワグナーを論じた論文が何点かあり、ロランは若いころそれを熱心に読んでいました。

したがって彼はこの先輩作家の小説も読んだものと思われれます。文学手法としての《意識の流れ》はデュジャルダンとともに語られることが多いのですが、ジャン・クリストフの幼児における、混沌とした星雲状態から個々の事物の認識へと目覚めてゆく過程もまたみごとに書かれています。二十世紀文学の流動的な特徴がはっきり見えます。そしてロランのばあい、ただ意識だけでなく、より広く《生》を総体として感じとらせる文章が創りだされているのです。

では、いまさっき申しあげた馬の影の叙述に立ち戻ります。

彼は馬の影を見つめながら心を慰めた。それもやはり驚くばかりの見ものだった。この真黒なけれどもは街道沿いに横倒しになって走っていた。夕暮れ、帰り途では、それは草地の一部分を蔽い隠していた。

積み藁に出くわすと、頭がそこにのし上がってから、通り過ぎたあとに、またもとの場所に戻るのだった。鼻面は引っ張られて破れた風船そっくりになり、耳は大蠟燭のようにでかく、また尖っていた。これはほんとうに影なのかな、それとも生きものかしら？ クリストフは、ひとりきりだったらこんなと出会いたくはなかった。おじいさんの影法師なら、そのあとを追いかけて頭を踏んで歩いて、ぐいぐい踏みにじったりもしたものだ、こちらが相手ではそんな気になれなかっただろう。――陽が傾いてきたころ、木々の影もやはり物思いにふけらせてくれた。その影は街道を横ざまにさえぎる柵を作りなしていた。それは陰気で怪奇な恰好の幽霊どもそっくりで、こう言うのだった。「この先へは行くな」。すると、馬車の車軸がぎしぎし軋みながら、また馬の蹄どもまでいっしょになって繰り返すのだった。「この先はいかん」。

以上の馬の影の物語を読みながら、自分も子ども心に

立ち返り、クリストフが大好きなお母さんのいる家へ帰ってきた場面まで来ると、読者も子どもといっしょに心のなかで叫びたくなります。「ああ、生きているって、すてきな！」……。ところで、動いてやまない馬の影の細密描写には、のちに二十世紀芸術の旗手たちが唱えることとなる《アンフォルメル》（無定形）の手法に通ずるところがあります。ロランは芸術新分野を開拓してゆく先駆者のひとりでもあったのです。

『夜明け』の巻のなかでもとりわけ印象的なのは、ジャ

ン・クリストフが母親の兄であるゴットフリート伯父と話しあううちに、歌とはなにかを悟る場面です。伯父が言うには、歌というのは作ろうとして作れるものではないということです。野原を伯父といっしょに散歩していたジャン・クリストフは耳を澄ませ、《大河や空や見慣れた星々》に感じいったのでした。そして彼はゴットフリートの腕のなかに身を投げかけました。こうしてジャン・クリストフは、伯父の胸のなかで、将来の音楽家として目覚めたのです。

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

*二〇一二年一月二七日（金）、関西日仏学館で催された『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会での講演を加筆、修正されたものです。

追悼 小尾俊人



編集は出会いである。出会いからはじまるネットワークづくりが編集作業になる。それは単数が複数に、個人が集団に転換する、いわば生物現象にも似た社会現象といえよう。ここで文明の基礎、つまりその維持と更新が行われるのであり、それは反文明のガン・ウイルスとたたかう城砦でもある。

出会いのきっかけをつくるもの——それは人であり、本であり、社会であり、国であり、あるいは勢い、また空気である。それらのつくる偶然の組み合わせが、混沌を秩序へと方向づけてゆく。それが成功したばあいに、世界のなかに「本」という名の新しい「モノ」が生み出されるのである。

小尾俊人

小尾俊人 略歴

大正十一年	(一九二二)	三月二日	長野県茅野市(現在)に生まれる。
昭和十五年	(一九四〇)	県立岡谷工業学校卒業。	
昭和十八年	(一九四三)	二月上京、羽田書店入社。	
昭和十九年	(一九四四)	学徒出陣で入隊し暁部隊(通信)に属す。	
昭和二十一年	(一九四六)	明治学院英文科卒業。	
		一月、山崎六郎、清水丈男らと「みすず書房」を創業、編集責任者。	
		佐々木斐夫の知遇を得、片山敏彦に会会う。	
		片山から宮本正清を紹介される。	
		『ロマン・ロラン全集』(第一次)刊行開始。	
昭和二十四年	(一九四九)	日本ロマン・ロラン友の会設立に参画。	
昭和四十六年	(一九七二)	財団法人ロマン・ロラン研究所理事。在任四十年。	
平成二年	(一九九〇)	みすず書房を退職。	
平成二十三年	(二〇一一)	八月十五日、死去。茅野市永明寺墓地に永眠する。	

主な著書・編著

〈著書〉

- 「本が生まれるまで」(築地書館 一九九四年)
- 「本は生まれる。そして、それから」(幻戯書房 二〇〇三年)
- 「出版と社会」(幻戯書房 二〇〇七年)
- 「昨日と明日の間」(幻戯書房 二〇〇九年)

〈共著〉

- 「丸山眞男の世界」(みすず書房編集部編 一九九七年)
- 「ゾルゲの見た日本」(みすず書房編集部編 二〇〇三年)
- 「高杉一郎・小川五郎 追想」(「高杉一郎・小川五郎 追想」編集委員会 二〇〇九年)

〈編著〉

- 「現代史資料一―三 ゾルゲ事件」(みすず書房 一九六二年、二〇〇四年(OD版))
- 「鷗外の遺産一―三」(幻戯書房 二〇〇四―二〇〇六年) (他多数)

ロマン・ロラン関係論文

〈機関誌「ユニテ」掲載〉

- 「日本におけるロマン・ロラン受容史一」(No.17 一九九〇)
- 「日本におけるロマン・ロラン受容史二」(No.18 一九九一)
- 「ふしぎな静けさ ―宮本正清の世界―」(No.20 一九九三)
- 「ロマン・ロランと日本人たち(一)」(No.22 一九九五)
- 「ロマン・ロランと日本人たち(二)」(No.23 一九九六)
- 「『文明化された野蠻』の時代に―映画『スペシャリスト』を観て―」(No.27 二〇〇〇)
- 「『ロマン・ロラン全集』の出版の頃」(No.28 二〇〇一)
- 「世界で初めてロマン・ロラン全集を出版した小尾俊人氏に聞く」(インタビュー) (No.35 二〇〇八)

〈季刊誌「高原」掲載〉

- 「ロマン・ロランにおける思想と行動」(一九五九)

ロマン・ロランとみず書房と小尾俊人さん

守 田 省 吾

村上光彦先生のあとに話をするというので、少々気がひける思いでいます。というのも、僕はデュシャトレ『ロマン・ロラン伝』の担当編集者であり、村上先生はこの本の翻訳者の先生で、黒子であるべき編集者が書き手の先生と同じ場でしゃべるといのはよろしくない、と考えているからです。しかし今日は、『ロマン・ロラン全集』を刊行してきたみず書房について、また、みず書房を創業してまずロラン全集を手がけ、ロマン・ロラン研究所とも縁の深い小尾さんのことについてもしやべりますので、現在のみず書房の編集代表として、とりとめのない話をさせていただきます。

いま、小尾さんと言いましたが、本来なら内輪の人間ですから「さん」づけはおかしい。ただ、退社されてからもう二〇年以上もたつこと、また社のみんなも「小尾さん」と言い慣わしてきたものですから、今日も「小尾さん」と言わせていただきます。これについてもご了承ください。

小尾さんが退社されたのが一九九〇年、僕が入社したのが一九八一年であり、僕の場合は最初の四年数カ月は営業と製作の部署に勤務していましたから、編集部で日々を共にしたのは、小尾さん最後の五年ほどしかありません（小尾さんが退職されて以降に、主に丸山眞男関係の本で小尾さんが編者・こちらが編集者（editor）という言葉はややこしい）の立場で数点仕事をしたことはあります。だから「思い出」を語るには、僕はまったくふさわしくない。

ただ、編集部に異動してから最初の二年ほど、ひとつ部屋で小尾さんと二人、机を並べていました（三十過ぎと六十代の二人の男が狭い一室でいっしょにいるのはあまり心地よい光景ではありません）。小尾さんが忙しいのは承知しているから、こちらはあまり無駄口はたたきませんし、彼の方も僕には話しづらそうでしたが、それでも、とても細かい編集技術から出版とは何かの類の大きな話まで聞かせていただいたり、一緒にいろんな著者に会いに出かけたりもしました。

印象に残っていることを一つだけ言うと、あるとき僕が「小尾さんは今何を読んでるんですか」と（あまりにありきたりのことを）聞いたことがあります。そのときの彼の答えは「忙しくて本なんか読んでられるか」でした。

今になってこの言葉は骨身にしみてわかります。編集という仕事をしていると、著者や関係者や見知らぬ人から本や冊子や原稿の類が毎日のように送られてきます。無視するわけにはいかず、ざっとでも目を通して感想を伝えなくてはならない。また、当然ですが、新たな企画をつくるために色んな本を買い込んだり、また現在進めている企画についても関連書を手元に置いておかななくてはならない。ずっと本や活字に囲まれながら、眺めたり、ポイントを押さえたりはしているかもしれないけれども、隅から隅まで一冊の本を読み通すことはほぼできません。小尾さんにとって「本を読む」とは「きちんと勉強する」ことであり、情けないこととはいえ、日々フル回転している現役編集者にとっては、これは不可能事に近く、ひとつの夢なのです。

最近出た『丸山眞男手帖』第六〇号（丸山眞男手帖の会、二〇一二年一月十日発行）に「追悼 小尾俊人」の小特集が載っていて、それを読んでいると、小尾さんが退職されて以降、「本を読んで」おられたことがよくわかります。最晩年にはあらためてドイツ語を勉強しながら、ゲーテの『イタリア紀行』や『エッカーマンとの対話』を原書で読まれるなどしておられた。内容理解・意味理解の深みに入り込むだけでなく、本を読むとは何であるのかを晩年の小尾さんがどう考えていたのか、うかがっておきたかったです。

もうひとつ、晩年の小尾さんは、それまで可能なかぎり控えておられた執筆活動を開始します。といっても、みずから進んでというよりは、編集者からのオファーに応えるかたちで、自分のやってきたことを中心に出版についてどんどん書きすめられました。それらは『本が生まれるまで』から『昨日と明日の間』まで、四冊の本にまとめられています。

『出版と社会』（幻戯書房、二〇〇七年）がなかでも典型ですが、小尾さんの文章には、ちょっとした追悼文の類であつても、かならず誰かが過去に書いたものを、それもけっこう長く引用するという特徴があります。それは小尾さんが心底から編集者であつたことを表わしています。

編集者というのは、自分の表現をそのまま提示するのではなく、その思いの一部を著者に託し、著者の表現を読者に伝えることができるようにあれこれ工夫して手助けし、ふさわしい造本をほどこして一冊の本を世におくことを仕事にしています。「編集者は黒子であるべきだ」というのはただ倫理的な謙虚さのことを言っているのではなく、

表現を最良に外化するにはどうすればよいか、という要請から来ています。小尾さんの場合も、自分の言いたいことを最良に伝えるにはどうすればよいかを考えた結果、「引用」という方法を選択したのだと思います。



さて、デュシャトレの『ロマン・ロラン伝』に話を移します。この本の原題は「あるがままのロマン・ロラン」で、その通り、この本も小尾さんの本に似て、未刊行資料も含め、ロランの作品をはじめ関係者の証言や書簡の引用を中心に構成されています。各章の小

見出しもロラン自身の言葉から成るという按配です。読んでいただければわかりますが、著者の構想は成功し、本書は二〇〇二年度のピエール・ジュールジュ・カステックス賞（フランス学士院倫理・政治学アカデミーの文学賞）を受賞しました。では、デュシャトレさんも、小尾さん同様、自分の表現したいことをより良く伝えたいがために、このような方法を選択し、そして成功したのか。あくまで推測ですが、半ばはそうであり、半ばは違うモメントがはたしていると思えます。

ロランが亡くなったのは一九四四年十二月三十日、この浩瀚な伝記が出るまでに六〇年近い年月が必要でした。没後直後には、よくあることですが、関係者と称する書き手による毀誉褒貶とりまぜたスキャンダラスな伝記は出たかもしれませんが。しかし、時代を画したロマン・ロランというほどの大作家の本格的な伝記が、どうして今まで刊行されなかったのか。

ご存じのように、日本ではロランの作品は一九七〇年代後半から読まれなくなります。ロランの国フランスでも、時間の前後関係はわかりませんが、ほぼ同じだったと思います。それはなぜなのか。

二十世紀前半は社会主義の広まり、第一次世界大戦、ロシア革命、民族問題、ファシズムの台頭、第二次世界大戦と、地球規模の歴史の大いなるうねりの時代でした。そのような大きな物語に呼応するかたちで、ロランは、半ば意識的に、半ば時代の要請として時代に接近していった。『ジャン・クリストフ』をはじめとする小説群や数々の戯曲、それに時に応じて書かれ、話された『精神の独立』『新しい人間性』『非暴力』『世界という祖国』などの言葉、これらが、作者の意図にかかわりなく、真の評価も定まらないまま、時代の大きな物語と対応して受けとられ、広まってきました。

たまたまですが、僕が昨年春に編集担当したポーランドの思想家・革命家、ローザ・ルクセンブルクの『獄中からの手紙——ゾフィー・リープクネヒトへ』（大島かおり編訳、二〇一一年）からの一節を読みあげます。プレスラウ（現

在はポーランドのヴロツワフ）の獄中にあったローザが、一九一七年九月九日にゾフィーに宛てた手紙です。

「ハンス・Dがこんどはロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を送ってきてくれました。あなたがこの本にどんな判断を下すか聞きたいものです。わたしはもちろん興味ぶかく読みましたよ、共感のもてる、真面目な、いい小説です。でもわたしの好きなスタンダールとかゴールズワージーのような、自由大胆で偉大な芸術ではない。ハンスの見方はわたしと違って、世界文学の真珠だと言っています。でも彼は乗せられて思いちがいすることが多いですからねえ」。

これが書かれたのはロシア革命のさなか、前年にロランはノーベル文学賞を受賞し、同じ一九一七年には日本ではじめて『ジャン・クリストフ』が後藤藤雄訳によって国民文化刊行会から出版され、以後、白樺派が中心となって戦前日本のロラン受容が怒濤のようにはじまります。

ローザとロランの直接のコンタクトはなかったと思います。強いて言えば、両者を媒介していたのは、第一次大戦直前に暗殺されたジャン・ジョレスだったでしょうか。

いずれにせよ、一見ロランと相入れないようにみえるローザが『ジャン・クリストフ』を読んで共感したという事実、好みも挿んで批評していたこと、そして「世界文学の真珠」という大仰で一種のイデオロギー的言い草を彼女が揶揄していたということは、ポイントだと思っています。

時間がなく、こちらの勉強もまったく足りなくて大雑把な話で恐縮ですが、一言でいうなら、ロランの一つ一つの作品がきちんと評価されることなく（フランス国内では賛否両論はあったようですが）、ロランという存在がある時期に絶対化というか神話化されたまま、読者のもとに届けられた。さきほど村上先生が『ジャン・クリストフ』について、当時の「意識の流れ」との関係で論じられましたが、他の作家の作品とは違って、ロランの作品は、歴史や同時代の文学などとの比較を通してきちんと読まれなかったのではないか。

フランス共産党との確執も含めた関係についてはここでは触れませんが、たとえば「〈精神の独立〉」を掲げたにもかかわらず、ロランはスターリン主義に屈服したではないか」という批判というか非難は、後づけはともかく、当時言われていたのでしょうか。政治哲学者のハンナ・アーレントという人がいますが、彼女は一九五一年に大著『全体主義の起原』を刊行し、ナチズムとスターリン主義の同質性を明らかにしました。しかし、刊行から十年、二十年ほどのあいだは、アーレントは「反共主義者」のレッテルを張られ、同書が信頼に足る古典として広く読まれるようになるのは、一九八〇年代になってからです。

このように、ロランはその存在・作品もろとも神話化された。そして大きな物語そのものが徐々に前面から身をひくにしたがい、その理想主義をシンボルとしたロランという存在は、脱神話化されるというより、忘却されていきます。フランスの例でいうと、これはポール・ヴァレリーにもあてはまります。

作家としてだけでなく、ロラン同様、知識人として世界に提言をつづけたヴァレリーは、ロランが亡くなった一九四四年十二月三十日から半年あまりたった一九四五年七月二十日にこの世を去りました。そしてド・ゴールはその死を悼み、彼を国葬で遇しました。そのヴァレリーも、日本を含めて一時は多くの国でたくさんの読者を獲得していましたが、一九八〇年を境にびたと読まれなくなります。そしてロラン同様、二十一世紀になってようやく、本格的なヴァレリーの伝記がフランス本国で刊行されます。この二人はそれぞれ違いはありますが、あるとき歴史の前面に華やかに登場し、その反動で長い忘却の時期も経験した点で共通しています。

そこから考えると、「あるがままのロマン・ロラン」を原題とするデュシャトレさんの本書は、ロランという存在をはじめて脱神話化し、歴史の中に位置づけたということになります。このような作品が生まれ、世に受け入れられるまでには、ここまでの時間が必要だったのです。ロランという人、その作品の一つ一つを歴史のなかで考え、その遺産を二十一世紀のわれわれがいかにわがものとしていくかは、ここから出発するのではないでしょうか。

一九四五年の日本に戻ります。おそらく戦前のロラン熱を追体験していたであろう小尾さんは、みずからの軍隊経験もふまえた暗い戦争期をへて、敗戦後すぐにみず書房という出版社を友人たちと始めました。ロランに一筋の光明をみた小尾さんは、敗戦翌年の春、片山敏彦先生に相談するために疎開先の信州塩田名に出向きます。ロランとフランスの事情に通じていた片山先生は、小尾さんの熱意に呼応するように、どうせ出版するのなら、ロランの全体をしっかりと提示すべきだと言い、ここにロマン・ロラン全集の企画がはじまりました。

「私はここでロマン・ロランの出版についてお願いした。御快諾をいただいて天にものぼらんばかりの嬉しさだった。全集七十巻の予約募集は驚くばかりの反響で、その年の夏に第一巻を発売することができた。一万部印刷、すぐ売り切れた。需要にたいし用紙と印刷が追いつかない時期で、現在の出版界とはまったく逆だった」（片山敏彦の気品）『昨日と明日の間』幻戯書房、二〇〇九年、所収）。

いまこそロランの精神を日本に伝えたいという小尾さんの熱意は編者・翻訳者、そして読者にも共有されています。第一回配本は「フランス革命劇・獅子座の流星群」（当初は同じ戯曲の「時は来らん」を第一回に予定していましたが、米軍占領下の当時、検閲で不許可となりました。米軍占領下の日本の出版問題は大きなテーマですが、ここでは省きます）。ふつう、全集の第一回というのは著者の代表作をもってきて、そうすることで部数を伸ばすというのが常套手段ですが、戯曲でここまで読者がいたとは、驚くばかりです。しかし、全集刊行にあたっては、けっこうきつい問題があったようです。

ひとつは、ロラン全集の原出版社であるアルバン・ミシエル社との間で契約を結んでいても、ロランの代表作である『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』は著作権が消滅していてフリーであったこと。これら二作品は、當時もそしてその後も大手を中心とした数々の出版社の文庫や世界文学全集の一部として刊行されつづけ、みず書房

としてはその実情と対峙しなくてははいけませんでした。

もうひとつは、原著者・原出版社に支払う著作権料の当時の高さです。先方の要求は一〇から一五パーセント。つまり、本の印税の一〇パーセント分をまず支払い、売れ行きに応じて一五パーセントまで上げるというもので、国内の訳者に支払う印税も併せると二〇パーセント近くが原価に占めることになります。他の商品同様、本という商品も原価がはね上がると、よほどの大部数を売らないかぎり、利益は生まれてきません。そこで、宮本正清先生がフランスに向いて先方と交渉されたようです。このあたりの事情については、小尾さんが『日本・ロマン・ロランの友の会』と財団法人ロマン・ロラン研究所 六〇年の歩み』(二〇〇九)に「へロマン・ロラン全集」発売の頃」と題して書かれていますから、ぜひ読んでください。なお、このような先達の努力もあって、海外著作権の現在の印税パーセントは平均すると六―八パーセントに落ち着いています。

以上の事情をふまえたうえで、みず書房がロラン全集をどのように刊行してきたかをデータで記してみます。

「第一次全五三巻(七〇巻の予定は諸々の事情で縮小、なおこの全集の各冊は薄いものだった) 一九四七―一九五四／ロマン・ロラン文庫全三三巻 一九五二―一九五五／ロマン・ロラン作品集全一〇巻 一九五三―一九五四／ロマン・ロラン全集第二次全三五巻 一九五八―一九六六／ロマン・ロラン全集第三次全四三巻 一九七九―一九八五／『魅せられたる魂』普及版一〇巻 一九五一・上製上下 一九五二・学生版 一九五六・特製版 一九五七／演劇と音楽・フランス語読本 一九五二／『ジャン・クリストフ』上製四冊 一九五四―五五・学生版四冊 一九五六・特製版 一九五七／ロマン・ロラン写真集 一九六六。その他単行本も刊行」

まいりました、というか、いくら先に述べた事情をふまえた対抗策の性格もあつたにせよ、当時の小尾さんを中心としたみず書房の徹底性はたいしたものですね。一部は紙型を使い回していたかもしれないかもしれませんが、今のようにならない時代ですから、文庫のように判型を変える場合には新たに組み替える必要もあり、それでも前進を重ねました。

言い方を変えると、それほどまでに読者がいたということです（このような本の出し方がひとつの先駆になって、六〇年代の日本では未曾有の全集ブームが生まれます。僕の実家にも河出書房の世界文学全集などが「飾って」あって、そこには現在も古典として読まれているものやロランの『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』と並んで、いまでは誰も読まないであろうショーロホフの『静かなるドン』やパール・バックの『大地』がありました）。

このようにして、小尾さんはみずす書房で活躍された四五年間のうち四〇年間を、他の数多くの仕事と並行して、ロマン・ロランの本の刊行に打ち込まれました。

二点だけ簡単に申し上げます。ひとつは、このように数多く出されたロランの本は、他のみずす書房の本同様、ただ書かれた内容を伝えんがために刊行されたのではなく、その一冊一冊にふさわしい造本・装丁がきめ細かに配慮され、それぞれが「ひとつの作品」として提示されていることです。「本」とはどういう存在であるかという、答えのないたえざる問題提起がここにはあります*。

* 三月二十九日に神楽坂の日本出版クラブ会館で催された『「ロマン・ロラン伝」翻訳・出版記念会——小尾俊人氏へのオマージュを込めて』東京の会で、小尾さんのご子息である真^まさまが、スピーチのなかで、次の主旨のことを話されました。「ふつうは本を手にとると、目次をみたり中をパラパラ眺めたりするでしょうが、父は違うんですね。まず手に取った本を開くことなくいろいろ回して、外見をあらゆる角度から見るとです。家にいるときでも持ってきた本をテレビの上に置いて、まず存在感を確認し、これまた色んな角度から眺めるんです。そうして、タイトル文字の大きさや書体、図版や写真の選定や大きさについてあれこれ言い、私にどうだっ、て聞くんですね」。ここからも、小尾さんがいかに本をオブジェとして考えていたかがよくわかります。しかし本はたんなるグッズではない。内容がまずあり、それにふさわしい活字・版面・紙・造本・手触り・装丁、その他もろもろが備わって、はじめて「本」になるということです。本とは内容と形式の一致である、というのが小尾さんの理想だったのではないのでしょうか。

もうひとつは、しかし、小尾さんが中心になったのは事実でしょうが、かくも多くのロランの本が刊行できたのは、

編集・製作・営業というみずず書房のそのつど関わった人たちはじめ、印刷・製本・書店・図書館、そして読者にいたるまでの相互コミュニケーションがあつてはじめてなしたということだ。ロマン・ロラン研究所のご支援は、むろん。この二点目はわざわざ記すまでもないのですが、このような追悼的な語りの場合、どうしても小尾さんを持ち上げ、それは一種の「神話化」として機能します。そういうことは小尾さんの最もきらいなことの一つでしたから、付言させていただくしだいです。

第三次ロマン・ロラン全集の刊行開始が一九七九年、その途中で僕はみずず書房に入社しますが、さきほど述べたように、この時期からロランの新しい読者は目に見えて減っていききました。それでも、小尾さんはフランスで新たに公刊された往復書簡類なども加え、ロランの全貌に近い姿をこの国の読者に提示しようと、一九八五年に全四三巻を完結されます。そのとき、敗戦直後に片山敏彦先生と交わした約束のことが、小尾さんの心のなかで去来していたでしょう。

時代は変わりました。本づくりのあり方も編集のしかたも、読書環境も変わってきました。時代と対峙するロマン・ロランのような作家も影を潜め、「知識人」という言葉はいまでは死語になりつつあります。しかし、戦争や貧困、暴力、それに原発問題などの困難を前にして、言論や表現、思想、文学、芸術、科学にかかわる人間はつねに時代に対してメッセージを伝えていく責務があることに変わりはありません。同様に、編集者も、本づくりを通して、直接的であれ間接的であれ、時代批判をくり返していかなければならない。デュシャトレさんの『ロマン・ロラン伝』刊行がひとつの契機になって、いまロマン・ロランの作品から何を学ぶことができるのか、編集者とはいかなる存在なのかを、あらためて考えてまいりたいと思います。

退職されて以後、小尾さんはみずず書房のことに口を出すこともなく、企画もほとんど持ってこられませんでした。

その小尾さんが珍しく「どうだ、この本やらないか」と持参されたのが、この本でした。初校には目を通していただきましたが、残念ながら出来上がった本を見ていただくことは叶いませんでした。いま、ご自宅には、小尾さんのお写真の隣りに、本書が並べられてあるとのことでした。

最後になりましたが、この『ロマン・ロラン伝』刊行にあたり、多大な出版助成金を賜りましたロマン・ロラン研究所に御礼申し上げますとともに、時代の風潮にふりまわされることなく、ロランの作品読解をはじめ地道につづけてこられた研究所の日々の活動を、その姿勢を変えることなくこれからもひきつづきお願いします、と申し上げて、僕からの話をおしまいにします。

（みすず書房編集部長）

*二〇一二年一月二七日（金）、関西日仏学館で催された『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会で発表くださったものを加筆、修正したものです。

小尾さんへのオマージュ

宮 本 エイ子

「小尾は死にました」。旧知の夫人とは別人のような冷たい声が電話の向こうにあった。人間誰でも死ぬが、知的探究心あふれる小尾さんは永遠の若者だと私は思っていた。いつも頼りにしていた。まさかの言葉に接し、私は呆然自失となり無意識に涙が出た。八月十七日の夕刻だった。「京都の宮本です」と、繰り返し申し上げても電話の向こうは取り付く島もない無表情な応対であった。今日はどうしたのかしら？ この異変を奇異に感じていた。だんだん元のイネ子夫人になられ、亡くなられた時のご様子や、「みすず」の守田さんが昨夜誰かと訪ねてきてくださったことなど静かに淡々とお話しくださった。守田さんたちは何時間もかけて夫人を説得して新聞社に公表された。小尾さんの死は「誰にも知らせない」

というのがご本人の固いご意思である。それは承知している。だから、とっさに夫人は他人に知らせたくないという反応、そのことが夫人のかたくなご対応となったのだろう。もっともその死は受け入れがたい事だろうし…。

私の電話は近々に開催するロマン・ロラン研究所の財団移行に関する理事会の議題に対してご意見をうかがうためである。まさかそれがご本人の計報に接しようとは！

「もうがたがたなんだよな」「体と頭がばらばらでまったくゆうことがきかないんだよ」と、今夏、何度か身体の不具合を小尾さんは訴えておられた。私は猛暑が過ぎれば復調されると信じていた。

小尾夫人にはじめてお会いしたのは四十年以上前、正清と結婚したとき上京し、ご夫妻にご挨拶したときであっ

た。夫人の奥に秘めた聡明で優しい精神科医のお顔がそのまま今日まで私に刻まれている。

小尾さんと宮本の関係は、GHQ統治の戦後、みずず書房のロマン・ロラン全集出版に遡る。この六十五年余の歳月のなかで、正清死後、財団法人ロマン・ロラン研究所が解散危機に見舞われたときも、小尾さんは、東京から「原点に返って」と、存続を訴え続けてくださった。

小尾さんへの最後となってしまった私の手紙は、『ロマン・ロラン伝』出版にあたっての進捗状況の共有だった。守田さんの七月のメールに書かれた最新情報について「まだ知らされていない」とおっしゃるので正確をきすためプリント。フランスから到着したばかりのロランの革命劇『七月十四日』上演舞台に掲げられたピカソ作、ミノートル幕のカラー絵ハガキのコピー。これまでピカソ作の幕の行方は誰に尋ねても不明だったが、先日分かったものである。トゥールーズにある美術館にあった。それはとても繊細で壊れやすくなって期間限定で公開されているという。いまになればその情報も加えられたことで私は慰めを得ている。

十年以上上京都へはお身体のご都合で小尾さんは来られなくなったが、講演会の具体的なご提案や活動運営について手紙やお電話でつねにご発信くださった。ロラン研究所の「ユニテ」の表紙装丁は十九号以来すべて小尾さんの役割になっていた。三月十一日の大震災当日、東京のご自宅も「本が散乱して足の踏み場もない」とおっしゃりながら、昨年の「ユニテ」三十八号の編集後記に、未曾有の大震災に触れてお書きくださった。この三十年、小尾さんは東京から司令塔の役を誠実に果たし続けてくださったのである。片山敏彦、小尾俊人、宮本正清の六十五年余続いたロマン・ロランラインは、小尾さんの死で切れた。

正清は早稲田大学を卒業して後ろ髪引かれる思いで東京を離れ、誰一人縁故のない古都・京都盆地にあって租界地のような関西日仏学館を職場とした。文化・学術の首都東京を仰ぎながらついに半生を過ごした。それだけにロマン・ロランにのめりこみ「僕は翻訳の職人」と自負しながら、他方、フランス人からは「ムッシュ・ミヤモトはフランス人」と敬愛されるほどになっていた。し



かしながら、小尾さんの本づくりから食文化に至るまで一流の洗練された都会的スタイルとその趣向は、「京都の吉兆に電話したら、値段を聞くような方はご遠慮をといわれたよ」と、その照れる好奇心にも、農民派の正清は到底及ばなかったように思う。

私がフランスにいるとき、一九七一年か七二年、日本のアルプスといわれる長野生まれの小尾さんが初めてヨーロッパに足を踏み入れられた。山のないパリをして「故郷へ帰ったような心地」、この「懐かしい」を髣髴する言葉をどれほど新鮮な驚きに感じたことか。私は忘れはしない。小尾さんのみずず書房は西欧文化の翻訳出版を根源とし展開しているが、その魂こそが、小尾さんの心身を作り、切り開き、浸透していたのだろう。

小尾さん、長年、大変お世話になりました。ほんとうにありがとうございました。心から敬意と感謝を申し上げます。

台掌。

『最後の扉の敷居で』から 11

村上 光彦

資料六十五——「ロマン・ロランからミシェル・ド・パイユレ神父あて」（一九四三年八月二十九日付）〔承前〕

「マルコによる福音書」第十章に、イエスに従っていきたくないと願った若者がイエスから、持ち物を売り払って貧しい人々に施したうえで従ってくるように言い渡されて、財産を捨てることなど自分にはできないと思って初志を断念せざるをえなかった、という挿話が語られている。イエスのほうはあらかじめ、若者がそのような態度に出るものと見抜いていた。イエスは彼を《いつくしんで》見つめたうえで、自分に従ってくるつもりなら財産を捨てなくてはならないと《決定的なこと》を告げたのだった。若者は、自分にはできないことを命じられて、それができないのを悲しみながら氣落ちして立ち去ったのだった。ロランはこの挿話に関連して、ド・パイユレ神父にこういう感想を書き送っている。

「このささやかな場面は、なんとキリストの真実の顔を見せてくれることでしょうか！　そしてその顔はなんと《人間的》だったことでしょうか！」

ロマン・ロランはイエス・キリストを心から愛していたとはいえ、イエスが人間でありながら、同時に《聖霊》を感得した《神の子》でもありうるとは信じきれなかったのだった。ロランは、《神》から授かった理性から外れるこ

とを拒んで、理性になかった精神の階梯を踏んで思考を進めた人だったからだ。彼は福音書を読むときにもその態度を貫いたのだ。

この一九四三年八月二十九日付の手紙のなかで、ロランはクロードルの名前に触れている。クロードルからロランあての手紙が届き、彼はそのなかでやはりイエスの顔に言及していたのだ。

クロードルはその手紙のなかで、聖パウロの「ローマ人への手紙」から《仔羊》「イエス」の怒り」という語句を引用していた。ロランはクロードルのその書き方について「彼が行っているように《地獄》への恐怖を利用するのは、ある種の人々にたいしてはよからぬ手段として働くのです」との感想をもらしている。ロランが言うには、《地獄》をもちだして嚇しつける態度に反感を覚えたがために、キリスト教徒の共同社会から何千人もの宗徒が離脱してしまった、とのことだ。さらにロランは、キリスト教徒間に見られるそうした威猛高な態度にたいし、ペギーが手ひどい非難を浴びせたことを想起している。《仔羊》の怒り」という語句は《地獄》への恐怖を振りかざす態度に通じていると、ロランには思えたのだ。

なお、ロランは以上のようにクロードルを評しながらも、ド・パユレ神父にたいしては「この話はクロードルにはしないでください！」と頼んでいる。ロランがクロードルにたいして批判がましい意見を抱いたことが先方に通じてしまうと、彼が苛立って疎隔の念を覚えるのではないか、と危惧してのことだ。ロランはそうように保留意見を述べたうえで「それに、彼の手紙はrippéeで、悲劇的で、心の底から書かれています」と、賞讃に転じてゆく。もっとも、ここでもロランは手放しに感心するばかりではない。「——ただし彼の心は、他人の心にとってはいくぶんあまりに浸透しがあるところがあります。——個人的に接していて、たがいに相手を見、目から相手のなかへ浸透している、まれな瞬間だけは別なのです。——それが彼の本性で、彼の天才で、しかも彼を囲む壁でもありません。——あなたがここにいられたら、彼の手紙を読んでいただけるのですが。彼がわたしにこれを書いてくれたことで、わたし

は彼に感謝していますし、彼に心配をかけてしまったことを残念に思っております」。

この手紙が書かれたのは一九四三年八月末近くだが、その時期、フランスはドイツ軍の占領下ということもあって、国内の事情について情報が自由に届くような状況ではなかった。そのため、虚報が流布したりもしたのだった。その手紙が書かれた翌月の九月には「ロンドン放送が、ロランは逮捕されてドイツの強制収容所に入れられた、との虚報を流した」(デュシャトレ著『ロマン・ロラン伝』、拙訳、四三ページ)りした。ついぞ十月には、アルジェ放送がロラン死亡の虚報を広め、『ル・プティ・パリジャン』紙十月十九日付は「ロマン・ロラン死亡」と報じた。ロランの生地クラムシー市ではすでに葬儀の準備にかかり、ロランが現に暮らしていたヴェズレーの人たちも地方紙でその報に接した。翌日、その地方紙は訂正記事を出した。ロランはまだ生きてはいたが、デュシャトレはこう評している。「ただし、弱々しげに！ 彼の生活はすっかり狭まって、日ごとの闘いとなっていた」。

ロランはド・パイユレ神父あてのこの手紙のなかで十月に再会できる喜びを語り、『いまからそのときまでにつらい試練の時期を過ごさなくてはならないのでは』と憂慮している。ロランはそのとき、市民どうしがたがいに封鎖され、分け隔てられることになりはしないかと心配したのだ。さらに彼は、体力の回復がはかばかしくないのを嘆いて『《最近の病気の猛攻撃によっていまだにひどく弱ったまま》だと告げ、『それだけにただの一日もむだにしないように努めている』と付け加えている。ところで、結びに近く記されたつぎの二、三行は意味深長だ。

「わたしの魂はかろうじて目覚めかけたところでして、その魂を『産み落とす』にはさらに二、三年の充実しきった歳月が必要となります」。

この来信を読み終えかけたとき、神父はこのくだりからなにを感じとっただろうか。目覚めかけた魂を出産するという表現は、ロランがとうとう入信を予期している証しなのではないか。神父はそう期待したかもしれない。ともあれ、『最後の扉』のすぐ前にさしかかって、ロラン自身、なにごとかを予感していたにちがいないのだが……。

資料六十六——「ロマン・ロランの日記」（抜粋）

日付は「一九四三年九月」とあるだけ。前項で述べたように、『ロラン死す』との虚報が流れたときだ。さて、資料六十六は「全体として、カトリック信者はわたしにはうるさくなりだしている」という語句が始まっている。しかし、ロランは信者のなかにも誠実な人がいるのを感じとっていて、括弧に入れてのうえだがこう記している。「彼らが誠実なときには、信仰は理性のうちのみずからの支えとなる十分な証拠を見いだすことができないことをまっさきに認めている」と。そこでロランは理性の人として、彼らの《愛》は目を閉じているのか、と驚いてしまう。彼らに言わせれば、自分たちの目は〈教会〉の光によって開いている。では、〈教会〉の権威の根拠はと問われると、彼らは伝統と『聖書』だと答える。『聖書』の権威は？と問われると、〈教会〉にもとづくと答える。堂々巡りしてやまない循環論法なのだ。ロランは論を進める。

こう言うほうが真実に近かろう。「信じるのは信じた^いからだ」と。そして、信じた^い人たちの共同体は魂に向かって自信と安寧とを保証してくれる。その仲間に加わることを拒む魂はすべて（あるいは、もっと重大なことだが——信じることができないと感じている魂はすべて）落ちつきがえられない根元となる。ただたんに個人的な救いにとってばかりでなく、信者たちの安寧にとってそうなるのだ。それは疑惑の影だ。信者にはそれはがまんできない。とりわけ、その影が自分の愛し、それとも尊敬する魂たちからかぶさってくるさいには。それとも、そのばあい、彼は忘れてしまうわけにいかない存在だからだ。

資料六十七——「ジャン・ソリユール神父からロマン・ロランあて」（一九四三年九月一六日付）

神父は近くカルメル修道会に入ると知らせてよこした。修道院には友人や親戚が大勢いるが、入会後もロランが自分の最良の理解者でありうると思う、との知らせだった。彼は無思慮にも完璧を追求してきたすえに正面からそれに身を捧げることとなった、というのだ。より活発な愛徳をつうじて、いっそう〈絶対〉へ向かって上昇してゆく人たちもいるだろうと認めつつ、彼は自分の信じるところをこう表明している。

「向こうには、さらに精神の超克がありまして、認識にかけての神秘家たちは、また精神のもっとも厳しい禁欲者たちはそれに専念しています。さらに向こうにはつねに十字架の聖ヨハネがいるのです」。

しかし神父が語るには、その道をまっさきに彼に見せてくれたのは（資料十八参照）ヨガ行者たちだった。神父はジャン・エルベールの著作によって觀照の技術を知ったのだ。（なおエルベールはヴィヴェカーナンダの著作を仏訳してフランス人読者にインド思想を広めた人だ。エルベールはわが国を訪れたことがあり、わたしもそのとき片山敏彦先生や山口三夫さんとともに氏に会った）。しかし結局、神父はカルメル会に入ること、神秘的觀照を深める道を選んだのだ。彼は十字架の聖ヨハネ・グループへの関心を抱きつづけている。「わたしの精神を淨め、そして〈神〉を觀照しつつ己を高める機会を逃さないようにしてきたのは、カルメル会士のおかげなのです」と、彼は書いている。神父はこの手紙の末尾近くでティエリー・ダルジャンリユール神父（軍籍においては海軍少将）にも触れている。「北フランスにおけるこの靈的伝統（カルメル会）の復興者は、臨時に海軍少将となったティエリー・ダルジャンリユール神父です」と。

『最後の扉』の編者デュシャトレが付した注によると、ジョルジュ・ティエリー・ダルジャンリユール（一八八九—一九六四）は修道士としてはルイ・ド・ラ・トリニテ神父という靈名を有していた。海軍兵学校を卒業後、彼は一九

二〇年に修道会に入り、一九三二年から三九年にかけて地方修道会の指導的地位にあった。第二次世界大戦中、戦闘が本格化した一九三九年六月一日（ド・ゴール將軍がロンドンで〈抵抗〉を呼びかけた直後）いったん捕虜となったが、三〇日後に脱走してイギリスに入国し、ド・ゴールのもとに馳せ参じた。彼は一九四一年から四三年にかけて〈太平洋方面高等弁務官〉となり、ついで〈解放〉後は一九四六年から四七年まで〈インドシナ駐在高等弁務官〉の地位にあった。そのあと、ド・ゴール將軍がいったん下野してから修道会に復帰した。

資料六十八——「ロマン・ロランからジャン・ソリユー神父あて」（一九四三年九月二十一日）

ロランはまず、神父の修道院入りにたいして祝意を表明している。「あなたの熱烈な魂が、あなたの偉大な守護の聖人たちの導き——〈雷鳴の子息〉〈使徒・聖〉ヨハネと〈夜〉の聖人〔十字架の聖ヨハネ（二五四二〜九一）〕との導き——を受けつつ〈猛火〉の中心へと戻っていかれますよう！」

ただし、ロランはソリユー神父が聖ヨハネ・グループの若い仲間を同じ方向へ引きずり込まないよう、念を押している。ロランはこの神父の勧誘熱心が度を過ごしそうなのを危惧していたのだ。かわりに、ロランはソリユー神父が司祭養成に精を出すように勧めている。ヴェズレーに来て六年、ロランは司祭の数が少いのを感じとっていたのだ。ロランによれば、田舎の非キリスト教化は、大部分の点で、この司祭の人員不足のせいなのだ。また、もっと困ったことには、その司祭たちが肩だ（くす）らけなことに起因している。田舎司祭たちはロランから見ても、聖職者として本質的な資格に欠けた、有害無益な連中だったのだらう。

彼は思わしくない健康状態に触れて、「せめて平和の再来まではもちこたえることができるように願っています」とつけ加え、さらに、その平和があいかわらずあやふやで不正なものだろう」との予想をも述べ、こう言いたしてい

る。「そして、わたしたちが渴望しているのは別種の平和なのです……《non quomodo mundus dat……》」「聖ヨハネの福音書」第二四章二七節——イエスは弟子たちに向かって《わたしはあなた方に平安を与えるが、ただし世が与えるような仕方によるのではなく》と告げた」。思い出していたきたいが、ロランは、《教会》の期待するような仕方ではイエスの神性を信じきれなかった人ではあったが、それでいて自分が《神の国》の一員であることを熱望していた。彼は、平和を願うにしても、世間と同じ仕方からではなく、それは《神》の心になかった平和でなくてはならなかったのだ。

資料六十九——「ジャン・ソリユー神父からロマン・ロランあて」(一九四三年十月十五日)

神父はロランに衣服をください、つまり名前をいただきたいとたのんでよこした。カルメル会のならわしでは、修道士はたがいファーストネームで相手を呼ぶことになっていた。したがって、別々の名でないと不都合を生ずる。自分の洗礼名をもちつづけるわけにいかないときには、ひそかに自分の守護者としている人の名前を選ぶこととなる。そこでソリユー神父はジャンからロマンに改名しようと思っていた。《この修道士が素足で粗衣を身にまとうカルメル会士になることをお許しただけでしょうか。すくなくともわたしの友人たちはその名の由来を察知することでしょうが》と書き送って、神父は返事を待った。

資料七十——「ロマン・ロランからジャン・ソリユー神父あて」(一九四三年、十月十九日)

ロランはこの申し出を感謝し、よろこんで自分のファーストネームを脱ぎ捨てて差し上げよう、と応じた。「そし

て、それがあなたを暖められますよう！ それはいつまでも少々はわたしから出たものであって、聖化されることとなりましょう」。ロランは彼にそのころの心境を打ちあけている。

わたしはこう感じているのですが、わたしからわたし自身がひとかけらずつ離れ落ちていきます。——わたしのありったけの荷物から——しまいには心に残るささやかな炎しかとっておかないこととなりましょう。

きょう、パリの新聞とラジオとが、わたしが死んだと知らせた模様です。彼らはいくぶん気が早かったのです！《やっこさんはまだ生きています》。あなたがほかの友人たちのようにこの虚報のために心配されなかったようにと願っています。

ロランはソリユー神父に向かって、《心のなかでごいっしょにいられるように》カルメル会入りの日取りを教えてほしいと頼んでいる。つらい修道院では祈りに集中することとなろうが、それでも外部との繋がりがことごとく断ち切られることのないようにとの希望を書き加えて、外側からは心のうちを伝えられなくても内面からは心を通じ合わせようと語っている。「つまりは同じことなのです」と言っている。

資料七十一——「ジャン・ソリユー神父からロマン・ロランあて」（一九四三年十月二十日）

神父はまず、アルジェ放送の虚報から発して各方面へ広まった「ロラン死す」の報から受けた心痛のことを語っている。「あなたの魂は、あなたという人から離れて独歩しつつ、人類の記憶のなかに存在していたのです。そしてわたしは、あなたの魂という《絶対》のこのささやかな反映とともにいて、祈りのうちにその日を過ごしたのです」。そうして祈りながらも、ソリユー神父は《神》が窮極的な意味ではロランを《おんみずからの《光》のもとへ呼び寄

せてはいない》を残念に思っていたのだった。彼はこう打ちあける。

さて、ご承知になっていたのですが、あなたがカトリック信者の飼い葉桶に帰ってはおられず、ただひとり人々を永遠の〈人類〉のうちに統合なさるキリストと交わっておられず、またわたしたちすべてを跪かせる赦しによって愛の充実を受け取っておられないのを、なんとも悩ましく思ったかを。それでいて、あなたはご自分の数々の手紙の、またあなたの魂のありったけの叫びによって、あのキリスト教徒すべてが交わす友愛の一員ではあられるのです。あなたはその一員であることをやめられたことなどめったにありません。それというのも、あなたがときおり挙げられた大きい叫びにはいまなおガリラヤの「初期キリスト教徒の」調子を発して響いたのですから」。

要約すれば、ソリユー神父がロランのために残念に思っていたのは、ロランが、〈キリストのパンと葡萄酒〉とをほかの信者と分ちあうことで、《生命による制約さえ受けることのない、あの神秘的な交わりをわたしたちとともに行っておられない》という一点なのだ。言いかえれば、ロランが信者として聖体拝受をしていないのが、ソリユー神父がもっとも残念に思っていることなのだ。

ロランはこの手紙を読んだとき、ソリユー神父が彼に必死の思いで訴えかけている論点をよく理解し、神父の熱誠に感謝の思いを抱いたものと思われる。しかし、神父の要望は、じつに晩年のロランの——《最後の扉》の直前に立ちつつ、深く宗教的でありながら〈神〉を愛するがゆえにみずからの理性に無理強いしようとしなかったロランの——霊的悲劇の核心に関わることだった。

〈ユニテ・フォーラム〉

私のロマン・ロラン

例年であれば身を切る様な風が吹くセーヌ河畔ですが、今年の一月末は、異常に暖かく感じられました。大雪に見舞われた私が住む新潟に比べると、春のような暖かさです。いつものようにボン・デザールを渡り、左岸のブリニスト達の脇を過ぎて、シテ島に目を向けると、変わらないサント・シャペルの尖塔は、冬のバリらしい曇天に突き刺さるように真直ぐに天上に向かっていました。

ロマン・ロラン「友の会」の設立に係った高田博厚氏が、ロランから、「何をおいても先ずサント・シャペルに行きたまへ。あそこにフランスの魂がある。」と教えられたといいます。キリストの荊冠が納められたというこの聖なる礼拝堂は、私にとって、ロマン・ロランに繋がります。サント・シャペルの高貴な姿は、ベートーベンを

Faire tout le bien qu'on peut,
Aimer la liberté par-dessus tout,
Et, quand ce serait pour un trône,
Ne jamais trahir la vérité.

Beethoven,
Feuille d'album, 1792

長谷川
和
宏



2012年1月28日、ポン・デザールよりシテ島を臨む

奏でるロランの姿そのものであります。

不勉強な私が通読した彼の著書といえ、『ジャン・クリストフ』（翻訳）など数冊しかなく、私に彼を語る資格はありません。しかし、折に触れて散読する彼の文章のわずかな枝葉でさえ、彼の思想を伝えるには十分な気もいたします。

いつしかロマン・ロランは、私にとって、フランス精神の象徴、となりました。自由、平等、友愛、のフランス精神は、「ロマン・ロラン研究所」の思想にも繋がるものでしょう。その末席を汚すことができる幸運に感謝しつつ、本会の益々のご発展を遠方より祈っております。

（新潟市 医師）

魂の遍歴―今の私

安 木 由美子

春の風吹く中、海を見下ろす丘の上。今は、生まれ故郷であるここ横浜に住まう私だが、数年前、京都の住人だったことがある。関東から出たことのなかった私にとって、夫の転勤という期間限定ではあったものの、この町で過ごした四年間は、実り多い出会いの与えられた濃密な日々だった。その中でも特にロマン・罗兰研究所との出会いは、今に至るまで私の心に優しく大きく影響を及ぼし続けているひとつである。

『ジャン・クリストフ』。この物語を私は今までに何度読んだことだろう。悩み多き若き日には夢中で通読し、大人になってからは人生の儚さや理不尽さ、自分の弱さを感じるたび、好きな部分や勇気づけられる優しい言葉を求めて拾い読みをしてきた。

京都に移り住んで一年近くがたったころ、新聞に読書会の告知を見つけた。そこには『ジャン・クリストフ』とあった。運命にも似た何かを感じ、思い切って参加希望のメールを送り、冬の日射しのやわらかな晴れた土曜日の午後、バスに揺られ、研究所の門の前に降り立った。いったいどんな人たちが集まっているのだろう。期待と緊張の入り混じる思いと共にいざ研究所の大きな門の前に立ってみると、子どもころ住んでいた実家にも似た雰囲気にはっとするような懐かしさを感じ、不思議と落ち着いた気持ちですんなり門をくぐった。

メンバーの皆さんは、初めて参加した私を笑顔で迎えて下さった。読書会は静かで思慮深い時間に包まれていて、私は自分の魂が呼応するような心地よさを感じた。

自己紹介ではスピノザやアランが好きだということ、そんな読書体験のつながりの中でロマン・ロランに出会い魅かれたことなどを話すと「ほう」と興味深げに聞いてくださる皆さんのあたたかさ。当時、小学校に上がったばかりの子どもの母親としての付き合いや、慣れぬ土地での暮らしの中で、ロランやスピノザの話をする機会などなく、この日の充実感には魂が生き生きと潤うような嬉しさがあった。宮本さんからは、ここに集う参加者ひとりひとりが音符であり、皆でハーモニーを奏でる場なのだということをうかがい、音楽を愛したロランの精神が根底に流れているその雰囲気、いつしか私の心はすっかり寛いでいた。そして皆さんに勧められ、次の読書会ではロランとスピノザについて報告をさせていただいた。『ジャン・クリストフ』の登場人物であるゴットフリートのモデルはスピノザではないか、などという私の個人的な意見も思い切って話したことを記憶している。

私がロマン・ロランに魅かれたのは、どんな状況になっても生きることにも飽きることなく、たゆまず歩みを進め

ていくような静かで力強い生き方を作品や書簡集などから感じたからだと思う。これはスピノザにも通じるところであり、若き日にロランがスピノザに感銘を受けたということが実感される。選ぶべき道に迷った時には自分の思いがロランの作品の中に鏡のように写し出されている気がして、私は繰り返し繰り返し、幾度となくその言葉を読んだ。

ロマン・ロラン研究所に出会ってから六年が経ち、我が子は中学生になり、夫は第二の勤め先に移り、私は仕事を始めた。少しずつ自分の時間が持てるようになって、昨年秋には読書会に久しぶりに顔を出し、今年一月に催された『ロマン・ロラン伝』出版記念会にも参加するなど、ふらりと京都まで足を延ばせるようになった。

昨年から読書会では『魅せられたる魂』を取り上げており、私は母の蔵書である「世界の文学」シリーズの訳本を読んで参加した。母は結婚する前、自分のお給料でこのシリーズを買い揃えたという。当時の母の年齢を遥かに超えた私がこうして母の蔵書でこの物語を読んでいること、またそのはるか前にこの本がロランによって生

み出されたことを思うとき、本との出会い、物語との出会いには時間や人種を超えた連帯が潜むことを確信する。思い返せば、私自身哲学科の学生だった頃、サルトルの想像力論を中心に勉強していて、今とはずいぶん違う考え方をしていた。その後社会人になって、仕事や恋にその時々悩み、挫け、様々な出来事を、思いを、乗り越えてきた中で出会った思想や文学が今のわたしを作っている気がする。人生の伴侶は、関わった人々と出会った本の数々だともいえるだろう。

そう、「人生」などという大げさな言葉でなく、今生きている私の「日々の暮らし」に彩りを添え、愛おしく

きらめくものにしてくれる数々の「出会い」と「つながり」の尊さとシンプルさ。当たり前の明日などない、と昨年痛ましく思い知らされた私達が、単なる希望だけでなく、勇気をもって生きるよう力づけてくれるものがそこにはある。

これから先も、ロマン・ロランやスピノザのいる地平のその先で様々な本や人に出会っていくことだろう。そんな機会により多くめぐり会える自分をめざし、しなやかに朗らかに生きられたら…と、最近の私は心から思うようになっている。

「ローザ・ルクセンブルクの手紙」とロラン

——みずす書房守田さんのお話に関連して、感じたこと

松田 有美子

一月二十七日、守田さんがお話の中で「ローザ・ルクセンブルクの手紙」にふられました。私にとってこの本は今読書会で読んでいる「魅せられたる魂」と共にとても大切な本であり、私の中ではいつも「アンネットとローザ」という二人の女性が重なり、また時には交差し、ていつも私の気持ちの中に生きています。

ローザ・ルクセンブルクは、一八七一年（一八七〇年という説もある）ポーランドに生まれ、ドイツで活動したマルクス主義の政治理論家であり、哲学者であり、もちろん革命家です。彼女は政治犯として何回も捕らえられ、その生涯の長い期間を過酷な獄中で過ごしましたが、その獄中から魅力溢れるたくさんの手紙を書いています。ローザは、一九一九年、虐殺されており、年代的にみ

ればロランとの接点はないし（と、守田さんもおっしゃっていました）、ローザはロランに会うことなく亡くなっています。けれど、その手紙の中でローザは「……私もまた、彼（ロマン・ロラン）を愛することを学び、ハネスレにこう申し出ていました。戦争が終わったらロマン・ロランと知り合いになるためにパリへ一緒に旅行するか、さもなければ、彼をドイツへ招待しましょう、と。人間はどうしたって一度しか生きられないものです。そしてああいうふうな立派な方々は、まことに数少ないものです。これらの人たちと個人的に知り合いになり、精神的接触を求めようとするぜいたくがなぜ断念されなければならぬのですか？……私たちはこの考えをもし『神様の思召』があれば、実行しようではありませんか？……」

（岩波文庫「ローザ・ルクセンブルクの手紙」より）と書いており、ローザがどれほどロマン・ロランを敬愛し彼に会うことを切望していたかということがとてもよくわかります。

そして私は、ロランもまたローザに一度も会ってはいないにもかかわらずローザ・ルクセンブルクという女性を「知っていたし、深く理解していた」と思えてなりません。なぜならば「魅せられたる魂」の中で描かれる魅力的なアンネットの人間像がこのローザ・ルクセンブルクにどうしても重なるのです。

政治的、思想的な立場というか二人の立ち位置はまったく異なります。けれど、その人を引きつけてやまないたぐいまれな人間的な魅力にたくさんの共通点を感じます。

ただ、私は、ローザ・ルクセンブルクを激動の時代に生きた一人の女性という狭い側面からだけしか理解しておらず、ローザの思想を深く理解しているものではありません。けれども活字になることを前提としない全く私的な同志でもある親友に宛てた手紙の中にアンネットの

イメージが重なるのです。

また、ローザはポーランドのユダヤ系の家庭に育ち、少女時代は思想的にも自由な家庭環境の中で育ち、頭脳明晰であり、大学では哲学や経済学だけではなく自然科学や数学も学びました。また、とても子供好きで、ルイーゼの子供たちとのエピソードの中にも私はアンネットとオデットを思い出しアンネットとイメージが重なります。そして、これらの手紙の受取人であり、この本の編者であるルイーゼ・カウツキーは、序文の中でローザ・ルクセンブルクについて「彼女の豊かな生活全体のシンフォニーが、これらの手紙の中からわれわれに向かって響いてくる。彼女の気分、彼女の機嫌、彼女の境遇の如何にに応じて、あらゆる音調がその中で鳴り響く。しかし、彼女はいつもまったく彼女自身であった。一人のまったき個性であった。真剣な仕事の力強いフォルテにおいても、鋭敏きわまる感情のかそけきピアノシモにおいても、アンダンテにおいても、アレグロにおいても、または、愉快なスケルツォにおいてもとても朗らかに満足して、すべてのわずらわしさを忘れているときにおいても。

というのも彼女はほんの少数者にしかみられないことであるが、生活を楽しみ、その美しさを味わい、そして生活から何回となく新しい幸福を取り出す術を会得していたからである。創造的な仕事に従事してしようと、他人の研究成果の摂取に真剣に努力してしようと、すべては彼女にとって楽しみであり幸いであった。一九一八年七月、神経をかきみだす無制限の拘禁にもかかわらず、それでもなお彼女は私にこう書いている。『私たちはきつと噛み破って切り抜けましょう。そしてなお残された美しいものを、どんなにわずかでも、感謝して楽しむことを忘れないようにしましょう』……

まさにこれこそが、何事にもまして、彼女を特徴づけるものであり、彼女の生活にあのような躍動をあたえるものであった。仕事の際にも娯楽の際にも、愛することでも憎むことでも、彼女はいつも変わらない灼熱に取り憑かれていた。……」(编者ルイーゼ・カウツキーの序文より)と書いています。

ローザ・ルクセンブルクは、一九一九年一月十五日に虐殺されてあれほど切望していたロマン・ロランにあら

という思いを果たすことができなかったのですが、ルイーゼが彼女の願いを果たします。そして、彼女は次のように書いています。

「幸運な偶然のおかげで私は望んでいたよりも早く、ローザの心からの願いを果たすことができた。一九一九年一月末、ベルンの国際会議に出席したとき、私はフランスの同志たちから、ロマン・ロランが彼の平和主義的思想のためにフランスへの帰国を禁じられたので、ジュネーブ湖畔で亡命生活を送っている、という話を聞いた。彼を訪ねあてようという私の決心は、胸に浮かぶやいなやすぐに実行に移された。ローザを追憶してこの感恩行為を実行しなくては、という気持ち私をかりたてたのである。そこで私は息子のカールを連れて出席し、ローザの死に深く打たれていたこの作家に、彼女の最後の挨拶を伝え、彼女が彼の人柄と彼の作品にどんなに感心していたか、そして彼女がこのことをいつかは自分の口から彼に述べたいと、いかに切望していたかを伝えた。」(编者ルイーゼ・カウツキーの「手紙」に関

する（注）書きより）

私はルイーゼのこの言葉を読むたびに熱い思いがこみ上げます。

ローザ・ルクセンブルクとロマン・ロランは一度も会うということはなかったけれども、ロマン・ロランは彼女の膨大な論文を読んでいたであろうと思われまし、その論文の行間から、ローザの人柄とその魅力を十分に読み取っていたはずだと思うのです。

ローザが虐殺によって亡くなったのが一九一九年一月十五日、ルイーゼがロマン・ロランを訪ねたのが一九一九年一月末、そしてアンネットは一八七五年生まれとして、一九二二年「アンネットとシルヴィ」は書き上げられています。

私は、私の全く拙い想像だけのことですが、ロマン・ロランの心の中にローザ・ルクセンブルクが必ず生きていたと思えてなりません。

久しぶりに「ローザ・ルクセンブルクの手紙」を手に取り、文庫本は私と共に年を重ねセピア色に変わったけれど、ローザの言葉は変わらずにやさしくまた力強く心に響く夜でした。また、手紙の中でローザは守田さんも紹介されていたように「ジャン・クリストフ」や「ベートーベン」についてもふれています。

改めてまた、「ジャン・クリストフ」を読みたい、と思った夜でもありました。

二〇二二年一月二十八日

ロマン・ロラン研究所便り

『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会

「ロマン・ロラン伝」翻訳・出版 新しい素顔に迫る

フランスの作家・思想家
『ノーベル文学賞』を受けた
ロマン・ロラン（1866-
1944）評伝の決定版
とも呼ばれる大著「ロマン
・ロラン伝」が、翻訳・出
版された。その出版記念会
が21日、ゆかりの左京区南

田原町の関西日仏学院で
ある。

「シャン・クリストフ」
「魅せられた魂」などで
知られるロランは、度々、



出版された「ロマン・
ロラン伝」—中京区

平和主義者、第1次世界大
戦では反ファシズムの態度
を取った。だが一面では
「スターリン下のモスクワ
の英雄」とも批判された。
それはなぜなのか。
今回の特設は、ロラン研
究の第一人者といわれるブ
レスト大学名誉教授、ベル
ナル・デュシャトレさん

が、米公判の自記・書簡も
用いて資料の整理を一新さ
せたもの。著者はこの書
物で心掛けたのは戦々の偉
大な経典、戦々の苦難をひ
くくるため、ロランとはど
ういう人だったかを発見す
ること、としている。

即大な資料をもとに、第
1巻（自伝）をわがもめた。
第2巻（試練）、第3巻
「新生」など全7巻に分
け、ロラン自身の言葉を紹
介する構成になっている。

原書は1947年に
刊行され、同年度の「フラ
ンス学士院論議・政治学ア
カデミー」文学賞を受賞し
た。日本で「ロマン・ロー
ラン」全巻を世に送り出した
「みすず書房」新編者の小

橋俊人さん（昨年8月10日
死去）が出版を決意。大井
次郎顕彰会会長の村上克彦
さん（82）が翻訳にあたり、
昨年11月末に刊行された。

出版版成に反力した財団
法人「ロマン・ロラン研究
所」（左京区）の蔵本エド
子朗事は「この評伝をきこ
かたに、人類愛に燃打ちさ
れたロランの理想主義的な
生き方をいま一度見直して
いたなければ」と話す。

「ロマン・ロラン伝」
（原題「あるがままのロー
ラン・ロラン」）は85巻、
900ページ、900円＋税、み
すず書房刊。

出版記念会は21日午後4
時から、村上さんの講演
「ローランの良心と平和は
れたロランの新しい素顔に
迫る傑作を訳して」があ
る。500円、問い合わせ
はロマン・ロラン研究所
（0476-22-1111）まで。
（上野真由）

二〇一二年一月一九日（木）朝日新聞掲載

京都会場 一月二十七日



村上光彦氏



フランス総領事・関西日仏学館館長、ジャンヴィエ氏スピーチ

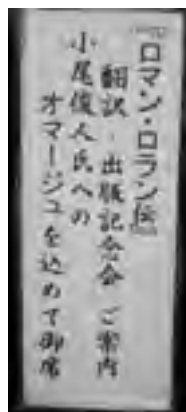


西成理事長

東京会場 三月二十九日



大谷祥子さん 白須 今氏
琴とヴァイオリン



園部逸夫氏 乾杯音頭



ご令息 小尾 真氏



みずす書房社長
持谷寿夫氏 閉会挨拶



左から 折田忠温氏、神山京子さん、黒田和美さん
小森謙一郎氏、飯田節子さん、濱田 陽氏



左から 守田省吾氏、小尾 真氏
みずす書房前社長 加藤敬事氏、西成勝好氏

一般財団法人へ移行

一般財団法人へ四月一日移行。これからは従来の財団法人の前に一般がつき一般財団法人ロマン・ロラン研究所と称します。一昨年度から内閣府や京都府教育委員会主催の説明会や個別相談に頻繁に出向いて指導を受けてまいりました。担当役員は和田義之評議員、宮本エイ子理事、外部では顧問税理士永易秀一氏、司法書士福田由美さんの協力のもとに、移行にこぎつけました。新しい制度のもとで一九七一年に設立した当時のフレッシュな意気込みを再び呼び込んで時代のニーズにも適応した活動をつづける所存です。なお力を賜りますようによろしくお願い申し上げます。

新役員

稲畑勝雄、永田和子両理事は顧問としてこれまで同様、心強いご援助をいただくことになりました。設立以来長年理事としてご尽力くださいました森本達雄先生には心から感謝申し上げます。自由な立場でご指導くださることを切に念じております。

この度、フランスで研さんを積まれた「国際法」および「国際生命倫理法」がご専門の位田隆一先生を新しく理事としてお迎えすることができましたことは大きな喜びです。先生は京都大学法学部教授を今年、三月三十一日、定年退官され、同志社大学教授に就任されております。

新役員は次の表の通りです。次号「ユニテ」でそれぞれの一言メッセージをお伝えできると存じます。

顧問 稲畑勝雄 永田和子

【代表理事】 西成勝好（大阪市立大学特任教授）

【理事】 野村庄吾（元奈良女子大学教授）

宮本エイ子（専従・日本ペンクラブ会員）

長谷川治清（同志社大学 ビジネススクー

ル教授）

シッシユ・ディディエ（甲南大学教授）

清原章夫（ゲンゼ研究員）

*位田隆一（同志社大学大学院グローバル・

スタディ研究科教授）

*能田由紀子（国際電気通信基礎技術研究

所・研究員）前評議員

*和田義之（弁護士）前評議員

【評議員】 奥村一彦（弁護士）

守田省吾（みすず書房 編集部長）

加藤澄子

シッシユ・由紀子（通訳・翻訳業）

*井土真杉（三重日仏協会副会長）

*森内依理子（森内織物株式会社 代表

取締役）

*中田裕子

*竹本浩典（国際電気通信基礎技術研究

所・研究員）

【監事】 西村七兵衛（法蔵館会長）

池垣 勇（稲畑産業株式会社元専務）

以上、敬称略。

（* 新任）

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典Ⅱ①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資
する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員Ⅱ一般賛助会員は年会費一口五千元から。特別賛助
会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	五・一五	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	一九八九	四・二〇	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
		苦悩のなかのインド	森本 達雄		六・九	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	一一・二七				九・二九	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
	六・二四	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥		一一・一七	ロマン・ロランとの出会いから	
一九七三	五・二六	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	一九九〇	一・二七	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	尾埜 善司・今江 祥智
一二・一八		私の人間観	末川 博				新村 猛
一九七四					六・二	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
六・二九		私の通った芝居の道	毛利 菊枝	九・二六		『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
一二・五		ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	一〇・二六		占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
			演奏…玉城 嘉子	一一・三〇		ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
一九七六				一九九一			
七・一一		ロマン・ロランとゲーテ	南大路振一	三・一		ロマン・ロランと私	松居 直
		ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一				

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ” ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る	
9・27	ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽 尾埜 善司・今江 祥智	中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ B・デュシャトレ	
11・29	初めにロマン・ロランあり 岡田 節人		ロランとフランス革命 河野 健二	
一九九二	〈大洋感情〉と宗教の発端 岩田 慶治		自然科学とゲーテ 岡田 節人	
6・26	ロマン・ロランとイタリヤ 戸口 幸策	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽 ——ベートーヴェン、デユカ他作品	岡田 暁生
9・25	ロマン・ロランの革命劇をめぐる 鶴見 俊輔		ピアノ演奏…小坂 圭太	
10・30	宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍	12・24	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」 で 映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	今江 祥智
11・27	静かにやさしき顔 佐々木斐夫			
	不思議な静けさ——宮本正清の世界 小尾 俊人			
一九九三	自伝的諸作品について 佐々木斐夫	一九九五		
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男	1・27	ロマン・ロランと日本人たち 私の歩んだフランス文学の道 片岡 美智	小尾 俊人
5・24	ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄	6・2		
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 岡田 暁生	

一九九六	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	10・30	ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏…小坂 圭太
6・14	レクチャーコンサート	岡田 暁生		ピアノ演奏…岡田 暁生	
11・16	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	ピアノ演奏…北住 淳	11・25	ロマン・ロランと大佛次郎	レクチャー…岡田 暁生
11・18	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	本山 美彦	一九九六	ロマンと音楽	村上 光彦
一九九七	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと		6・11	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	岡田 暁生
1・17	魯迅	區 建英	10・8	「園田高弘ベートーヴェンを弾く」	園田 高弘
6・6	わが青春と一生	岩淵龍太郎	12・1	お話とピアノ演奏	森本 達雄
9・19	ロマン・ロランと結核の時代	福田 真人	二〇〇〇	ロマン・ロランとインドの精神	
10・4	ピアノとチェロのための夕べ		10・13	ロマン・ロラン没後五十五年と日本	佐々木斐夫
	ピアノ演奏…北住 淳		二〇〇一		
	ロマン・ロラン記念コンサート		2・23	ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉	青木やよひ
	チェロ演奏…小川剛一郎			シンポジウム	今江 祥智
一九九八	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	6・23	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念	尾埜 善司
6・8	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放			コンサート	神谷 郁代
9・25		柳父 罔近		「神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く」	

12・21	ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー	二〇〇四	『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』 朗読とおはなしの会
	デイディエ・シッシュ	5・29	おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子
二〇〇二	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ	7・16	ロマン・ロラン記念サマーコンサート 演奏…ピエール・イワノヴィッチ 郁子・イワノヴィッチ
4・20	ロマン・ロランの後継者たち		抗日中国における中仏文化交流 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評 価したか
11・11	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード	9・11	現代の法とヒューマニズム 加古祐二郎と瀧川事件 ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート 梅原ひまり 神谷郁代デュオ ヴァイオリン演奏…梅原ひまり ピアノ演奏…神谷 郁代
二〇〇三	演奏…ピエール・イワノヴィッチ 郁子・イワノヴィッチ	二〇〇五	生々発展する魂 ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
4・19	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード	1・29	青木やよひ
5・10	尾埜 善司	6・12	
5・31	戦争と平和、科学を考える プリーモ・レーヴィを語る		
11・22	ジル・ド・ジエンヌ 解説 西成 勝好 ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える 峯村 泰光	6・25	

10・29	交差する肖像	村田まち子・宮本エイ子
	ロマン・ロランとクロードル	
	J・F・アンス	
	通訳 原口 研治	
10・13	中国研究を通しての日仏交流	
	京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合	
	狩野 直禎	
二〇〇六	『ピエールとリュース』を演出して	
11・24	戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン	
	山口 俊章	
二〇〇七	日本におけるロマン・ロラン受容史	
1・20	シッシュ・ディディエ	
	通訳 シッシュ由紀子	
	琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート	
	大谷 祥子	
	豊 剛秋・増永雄記	
2・3	歌と朗読の会	
	歌…下郡 由	
	「ピエールとリュース」朗読	
	尾埜 善司 ほか 会員	
7・21	朗読の会	
	第一次世界大戦とロマン・ロラン	
	そして『母への手紙』	
10・4	朗読の会	
	親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』	
	会員たち	
	中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷	
	榎本 泰子	
	前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演	
	ロマン・ロランと日本人たち	
	尾埜 善司	
	ロマン・ロラン国際平和シンポジウム	
	宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』	
	「わらい」朗読	
	尾埜 善司	
	フランソワ・ラベット	
	ロマン・ロランが愛したベートルヴェン	
	ピアノ演奏…神谷 郁代	

二〇〇九

2・7

朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』

ピアノ演奏…岩坂富美子

朗読…下郡 由ほか

二〇一一

11・19

フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で

小森謙一郎

「日本・ロマン・ロランの友の会」六十周年記念

6・13

レクチャー・ギター コンサート 西垣正信

9・30

フー・ツォン ピアノリサイタル フー・ツォン

10・24

犠牲の宗教への問い 高橋 哲哉

二〇一〇

7・24

小林多喜二とロマン・ロラン——反戦・国際主義

の文学を求めて—— エヴリン・オドリ

9・29—10・3

一九五三年のフランスの子供の絵特別出品（京

都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓

作品展）

ピアノリサイタル

10・9

神谷郁代

二〇一一

2・19

朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トル

ストイの生涯』『伯爵様』

会員たち

1・27

『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会

——小尾俊人氏へのオマージュを込めて——京都会場

講演「ジャン・クリストフ」を読みかえして

村上 光彦

ロマン・ロランとみず書房と小尾俊人さん

守田 省吾

スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ

朗読の会

3・5

女たちの祭典・ワークシヨップ『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ 会員たち

3・29

『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会

——小尾俊人氏へのオマージュを込めて——東京会場

琴とヴァイオリン合奏

琴…大谷 祥子 ヴァイオリン…白須 今

『春の海』 宮城道雄 作曲

『夢のあと』 フォーレ 作曲

寄贈図書 受納日順

- 1、森本達雄氏 タゴール著 森本達雄編訳
新版『死生の詩』 人間と歴史社
- 2、小森謙一郎氏 筆者掲載誌 『思想』9月号 No.1049
「自然学のあとにくるもの」
- 3、みすず書房 『ロマン・ロラン伝』デュシャトレ 村上光彦訳
- 4、フランス ロマン・ロラン協会冊子 Cahiers de Brèves
no 27, 28
- 5、フランス クラムシー芸術科学協会 冊子 2011 Bulletin
de la Société Scientifique et Artistique de Clamecy

十 訃報 十

「ロマン・ロラン友の会60年史」の編集にご尽力いただいた**大出學氏**（西洋美術家）二〇一一年十一月六日、腎臓がんのため死去。享年七十。友の会には四十数年前から参加し、「ユニテ」のフランス語訳などにご協力いただいた。

読書会に熱心な**中西明朗氏**（評議員）、「ユニテ」の編集にもお力を注いでくださった。長年肝臓病を患われておられたが、最後まで生きることの大切さを失わず私たちに勇気を与えてくださった。二〇二二年二月十九日、肝臓がんのため死去。享年七十三。

短 信

*大谷祥子さん 箏曲の新しい展開シリーズVol.1を
関西日仏学館を拠点に開始。シリーズ化を目指す。
*山口俊章氏 史伝 『鎌倉源家北条記』（未知谷）
発刊。

読書会報告

例会、原則第四土曜日 午後二時～四時

於 ロマン・ロラン研究所

二〇一一年、四月二十三日、五月二十八日、六月二十五日、七月二十三日、九月二十四日、十月二十二日、十一月二十六日。

二〇一二年、一月二十八日、二月二十五日、以上九回。二九三～三〇一回、友の会から数えると四七六回終了。

テキストは、『魅せられたる魂』序／アンネットとシルヴィ／夏／母と子

通年 参加総数九十八人

(アルファベット順・敬称略)
* 特別会員

* 特別会員

『ユニテ』編集を終えて

三・一一の東日本大震災・原発事故から一年が過ぎた。地震、大津波、原子炉の溶融・水素爆発が複合した史上類の無い災害であった。被災者の方には万全を尽くさねばならぬことは言うまでもないが、復興へ向けて今すべきことが山積している。

犠牲者は再び生きて戻ることはない。放射性物質は直接目に見えず、今被害がなくとも、ダメージを受ける可能性も残る。原発の廃棄物処理はまだ永久に封じ込める手立てはない。その点でも原子力戦争と呼べるものだ。その悲惨さは全く変わるものではない。

政府の行政措置や東電の対応に対して責任を問う厳しい論議が今も果てしなく続く。比較するものがないから歴史判断を待つべきものもあろう。そうした議論の中で危機的状況にある社会や政治の危うさや矛盾点が明らかになってきている。

それにしても、広島・長崎で原子力の被害を受けた日本人が再び三度と放射能の被害者になろうとはなんということだろうか。ロマン・ロランがもしそこにいたら何

と考えたろうか？ 反戦と平和の作家はどう行動したのだろうか？ あの時から、随分時がたったように感ずるが、アッと言う間の一年であったようにも思う。

*

昨年度のロラン研関連ニュースのトップは、『ロマン・ロラン伝』がみずす書房から出版されたことだろう。著者のベルナル・デュシャトレ先生夫妻は一九九四年に研究所のためにわざわざ来日され、ロラン没後五十年記念で講演。小尾俊人さん、村上光彦さんはじめ研究所会員とも対話されている。翻訳者の村上先生は『ユニテ』に毎号連載の執筆者である。この本の出版にあたり、研究所も寄付を募りわずかが助成金を出すこともできた。何しろ大著である。次号で読者からの書評など頂ければ幸いだ。

本号では巻頭に小森謙一郎さんの「フロイトとロラン」を掲載することができた。十九世紀の終りから二十世紀初めの激動の時代に生き、活動した二人の巨人の接点はあまり知られていなかった。筆者の小森さんは日記や書簡など、わずかの資料から克明な考察で二人のすれ違った思いを分析されている。今後のさらなる研究を期待し

たい。

みずすの守田省吾さんには出版記念会で「ロマン・ロランとみずす書房と小尾俊人さん」と題してより具体的な要素を交えたお話をいただき掲載できた。今後は守田さんに「本のエキスパート」として助言いただきたい。

ユニテ・フォーラムには長谷川和宏、安木由美子、松田有美子各氏から、それぞれの玉稿をいただいた。心からお礼を申し上げます。

*

この一、二年の間に、研究所にとっても、編集部の方々にとっても大切な人を次々と失った。二〇一〇年末には前理事長尾埜善司さん、その前年に筆頭理事佐々木昌義さんが逝去された。前号でご両人の追悼の辞を書いておられた小尾俊人さんが亡くなられた。小尾さんはロマン・ロラン出版をベストセラーに導いた戦後日本の代表的編集者であり、出版界では神話的な人物だった。晩年はこの『ユニテ』編集の中心的存在だった。『ユニテ』の企画や表紙のレイアウトを考えていただいたり、材料を提供していただいたり、原稿の校正まで丹念に見ていたいただくことも多かった。私たちは今その大きな柱を失った思

いがする。

その上もう一人の『ユニテ』編集者の一人だった中西明朗さんを失った。原稿の読みにも手抜きをされなかった。一目おく存在だった。長い辛い闘病生活を続けながらも最後まで『ユニテ』の心配をしていた。笑顔の美しい好漢だった。

……謹んでご両人のご冥福を祈りたい。

*

かねてから懸案とされていたのだが、新しい法制と政府の指導で研究所は四月から一般財団法人へ移行することになった。この間多くの人たちのお世話になった。関係各位の尽力に感謝したい。

研究所はこの曲がり角を今通過しつつある。新役員に期待するところが大大だ。

(文責・野村庄吾)

編集部

野村 庄吾	守田 省吾
西村七兵衛	中田 裕子
	宮本エイ子

ユニテ 第三十九号

発行日 二〇一二年五月三十日

発行者 一般財団法人

ロマン・ロラン研究所
理事長 西成勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六―八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九―五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Sommaire

Freud et Romain Rolland après la catastrophe, avant l'illusion	Ken-ichiro Komori
Nouvelle lecture de <i>Jean Christophe</i> à l'occasion de la parution de la traduction de <i>RR tel qu'en lui-même</i>	Mitsuhiko Murakami
À la mémoire de Toshito OBI	
Romain Rolland, les éditions Misuzu et Toshito OBI	Shogo Morita
Hommage à Toshito OBI	Eiko Miyamoto
<i>Au seuil de la dernière porte</i> : réflexions (suite)	Mitsuhiko Murakami
Mes pensées sur Romain Rolland	Kazuhiro Hasegawa
Parcours d'une âme: moi-même aujourd'hui	Yumiko Yasuki
Lettres de Rosa Luxemburg et Romain Rolland	Yumiko Matsuda
compte-rendu de la réunion organisée à l'occasion de la parution de la traduction de RR...	
La liste des membres renouvelés du conseil d'administration après la réforme législative	
Compte - rendu des activités de l'Institut Romain Rolland	
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2011 des membres et donateurs	
Postface	Shogo Nomura